



道田池 4 号墳出土 金銅装圭頭大刀

大阪府和泉市道田池古墳群出土資料調査報告

繰納民之

はじめに

道田池古墳群は、大阪府和泉市鶴山台に所在する古墳時代後期の古墳群である。当古墳群は、1960年、日本住宅公団信田山宅地造成計画に際し、和泉市教育委員会や石部正志、森浩一らが分布調査を行う過程で初めて認知され、任意団体「和泉市信太山遺跡調査会」によって、1965年の冬に発掘調査が行われた。

発掘調査の成果は、『信太山遺跡調査概報』（以下、『概報』とする。）において、各古墳群の遺構の状況や出土遺物の員数などが報告された。まだ類例の少なかった、木槨内に火熱痕跡を受けない横穴式木室（「カマ形木槨」）が4号墳で発見され、衆目を集めたようである。しかし、正式な報告書は刊行されないまま今日に至っている。

ところが、近年、当館における森浩一資料（以下、森資料とする。）の整理過程で、道田池古墳群の出土資料が再認知され、拵えがほぼ完存する金銅装束頭大刀など、当古墳群を再評価する上で極めて重要な資料が館蔵されていることがわかった。現在、こうした「未報告」資料の存在が考古学研究を推進する上での障壁となっていることは、周知の事実である。資料の遺存状況を鑑みても、迅速な資料公開が必要であると考え、今回報告に踏み切った。

第1節 道田池古墳群について

1. 地理的環境

道田池古墳群は大阪府和泉市鶴山台2丁目に位置している。この町名は鶴山台団地造成時に整備されたものであり、当時は和泉市太町の町域に所属する信太丘陵（信太山）の中央部の傾斜地であった。

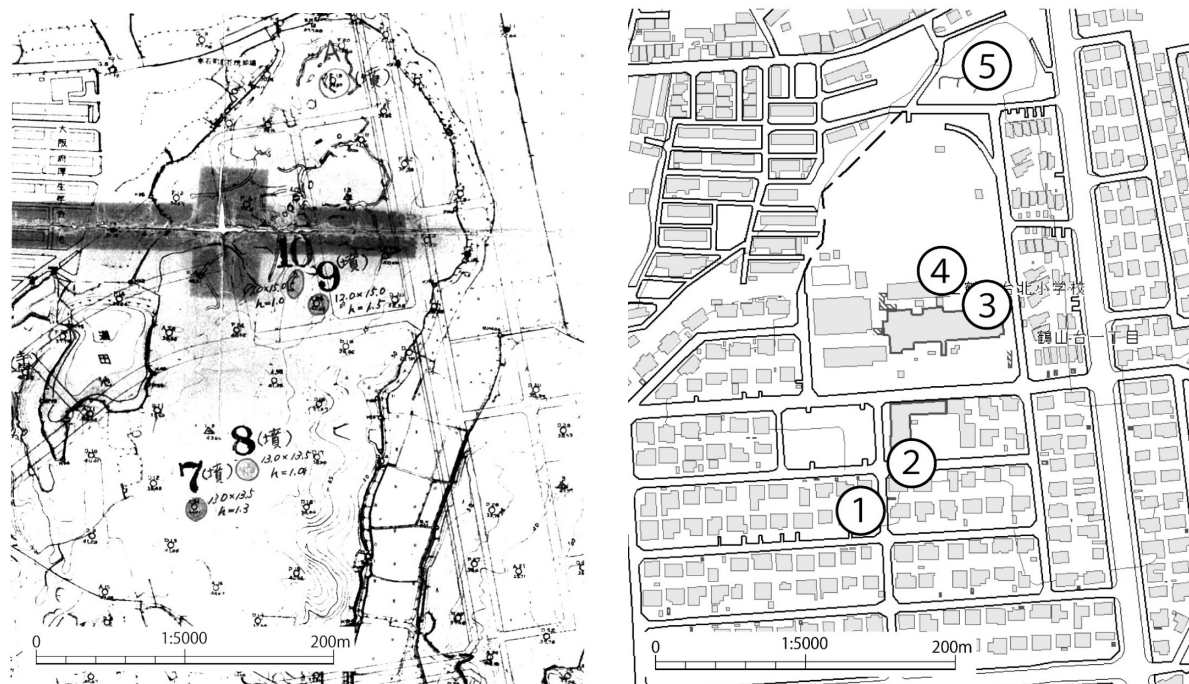
信太丘陵は、大阪府の南を限る和泉山脈から北北西の方向に展開する、広大な丘陵地形「泉北丘陵」の一部であり、和泉市域の北西部一帯を占める。東側を和田川と支流の甲斐田川、西側を槇尾川、南を光明池に限られ、北の先端を大阪湾に沿った海岸平野に突出させる南北約6km、東西約3kmの範囲である。海岸平野から三条の谷（大谷池谷、大野池谷、惣の池谷）とその支流が入り組んだ樹枝状溪谷を成し、大尾根に多くの枝状の小尾根をつくりだす複雑な地形を呈している。道田池古墳群は、大野池谷の海岸に近い谷口から西側に入り込む支谷の北西側斜面に位置する。

2. 歴史的環境（図1）

信太丘陵に所在する古墳では、古墳時代前期末の前方後円墳で、「景初三年」銘鏡の出土で知られる、和泉黄金塚古墳が著名である。海岸平野を望む丘陵最北端に位置し、前方部前方（南側）には墳丘不明の番所塚古墳が存在する。



図1 道田池古墳群の位置 (S=1/25000)



1. 信太山遺跡調査会作成の分布図

2. 1を元に作成した道田池古墳群の分布図 (国土地理院地図)

図2 道田池古墳群の分布図 (S=1/5000)

また、惣の池谷の西側尾根には同じく前方後円墳の丸笠神社古墳が存在し、円筒埴輪の型式から和泉黄金塚古墳と前後する前期末から中期初頭の時期が推定される。これらより南の台地上には信太千塚古墳群が展開しており、前方後円墳1基、大型円墳2基を含めた84基が確認されている。中期後半から形成がはじまり、群のひろがりは南北約1.4km、東西1.7kmであるが、その位置は信太丘陵の南西側面、つまり榎尾川に面する丘陵裾から斜面および頂部にわたっている。

これに対し、信太山丘陵の北東部の丘陵先端部においては聖神社古墳群のような少数の古墳で構成された群集墳、そして次郎池西古墳、阿闍梨池古墳、菩提池古墳などの単独墳が主に存在する。道田池古墳群もこの丘陵の北端部に位置する。

3. 道田池古墳群の構成

当古墳群は、かつて志保池、菩提池の北方に存在した「道田池」という灌漑用溜池の東側に所在し、計5基から成る。1・2号墳、3・4号墳が隣接して築造されているのに対し、5号墳は古墳群の北端部に単独で存在する。この内、1～4号墳が今回報告の対象とする古墳であり、信太山遺跡調査会によって発掘され、現在墳丘は残っていない。一方、5号墳は未調査であり、和泉市鶴山台2号公園内に墳丘が遺存する。

信太山遺跡調査会が作成した古墳の分布図が残っており、現在の地形図とも整合性がとれる（図2）。これによると、1・2号墳は現在の鶴山台3号公園付近、3・4号墳は和泉市立鶴山台北小学校のグラウンドにかつて存在していたようである¹⁾。

4. 道田池古墳群発掘調査の経緯

先述したように、道田池古墳群は信太山遺跡調査会によって発掘調査が行われた。調査に至る経緯については、既に『概報』において触れられているため、以下に概要のみ記す。

1960年初春頃、日本住宅公団信太山宅地開発事務所長から和泉市教育委員会に対し、同公団による信太山宅地造成計画区域内に文化財があるかどうかについての問い合わせがあり、市教委から森浩一、石部正志に教示が求められた。その後、森氏らの踏査・分布調査が行われ、道田池古墳群を含めた10の遺跡が新たに認知された。

公団当局は、この遺跡群の学術性を認め、古墳2基の現状保存とその他遺跡の調査費を支出することを許可した。しかし和泉市は、市会の決議によってそもそもの宅地造成計画に反対の意思を示しており、調査費を市が受け取ることはできなかった。そのため、和泉市文化財保護委員会と同市史編纂委員会に属する有志11名が、任意団体「和泉市信太山遺跡調査会」を設立し、発掘調査業務の委託を受けることとなった。

信太山遺跡群は、1965年の11月～翌年の4月にかけて調査された。道田池古墳群については、12月20日に2号墳の外形測量、12月25～1月4日に1～4号墳の発掘が行われた。

5. 道田池古墳群の既往の評価と横穴式木室²⁾研究史概観

道田池古墳群は、主に横穴式木室の構造を持つ古墳群として知られてきた。横穴式木室とは、木で組まれた骨組みに粘土などを貼り付けて部屋とし、遺体を埋葬したのち火をつけて燃やす埋葬構造であり、道田池古墳群における2・4号墳がこれに該当する。1959年の日本考古学協会第23回総会において森浩一が「窯槨を主体施設とする火葬古墳の新例」として陶器千塚21号墳の検討報告を行ったことを端緒として、横穴式木室（「カマド塚」）の具体的な研究が始められた（森1959）。この報告の後、同じく横穴式木室の構造をとる聖神社2号墳や菩提池西古墳などが発掘され、道田池古墳群の調査もこれらと同時期にあたる。また、森氏は横穴式木室について、「煙出し」と呼称される構造の存在から、須恵器工人との関係性を指摘しており、その事例の一つにも位置付けている（ここでは道田池4号墳のように焼けていない例も窯槨に含めている）。こうした横穴式木室を持つ古墳を、森氏は民間仏教との関連で認識しているのに対し、水野正好らはあくまでも火葬ではなく「火化」とありとし、新たに「横穴式木心粘土室」という名称で再定義を行った（水野1974）。

横穴式木室は当初、畿内を中心に見られる埋葬方法と認知されていたが、その後、北陸や東海地域においても類似した構造をもつ埋葬方法が導入されていることが分かり、柴田稔の「横穴式木心粘土室の基礎的研究」において、はじめて全国的な集成を元にした研究が行われた（柴田1987）。

近年の畿内地域を対象とした横穴式木室の研究には、道田池古墳群と隣接した地域に展開する陶器千塚の調査（大阪府教育委員会2007）や、茨木市に所在する上寺山古墳の再検討（上寺山古墳研究会2015）などがある。また、小森哲也氏は、横穴式木室の構造の地域性という視点から、東海・近畿地域の地域間交流の実態を明らかにしている（小森2013）。

第2節 同志社大学歴史資料館所蔵資料の概要と本報告の整理方針

1. 森資料の概要

道田池古墳群の出土資料については、過去に、当館の常設展示等で何度か活用されていたようである。しかし、今回の報告にあたる再整理によって、発掘調査の写真や森浩一直筆の調査日誌が発見された。また、発掘調査時に作成された遺構原図が、同志社大学考古学研究室から新たに見つかり、調査の仔細を復元できる可能性が浮上した。

そこで本項では、資料報告に先立ち、館蔵する道田池古墳群の出土資料、および図面・日誌・写真類の状況整理をすることとしたい。

まず、館蔵する道田池古墳群の出土資料であるが、『概報』において記載されている資料の員数と、所蔵資料および本報告の図番号を対応させたものが表1である。いくつか欠落した資料が見られるものの、主要な資料は概ね館蔵されている³⁾。

また、図面・日誌・写真類については、以下の資料が存在する。

A. 道田池2号墳墳丘測量図、遺構平面図、断面図

B. 道田池3号墳掘方平面図、土層断面図、遺構平面図及び縦断面図、遺構横断面図、装身具出土状

表1 道田池古墳群出土遺物一覧

	『概報』		歴史資料館	本稿		
	名称	員数	森資料の登録番号	名称	員数	番号
1号墳	鉄器	断片	—	—	—	—
	須恵器片	若干	—	—	—	—
2号墳	銅環	1	536-3〔No.8 古墳 第2次埋葬 銅空環〕	銅環	1	図8-1
	水晶勾玉	1	536〔No.8 古墳 第2次埋葬? 勾玉〕	水晶勾玉	1	図8-2
	水晶切子玉	1	536〔道田池 No.8 床出土の切子玉〕	水晶切子玉	1	図8-3
	管玉	2	536〔No.8 古墳 第2次埋葬 管玉2個〕 536〔No.8 古墳 第2次埋葬 管玉2個〕	管玉	2	図8-4 図8-5
	直刀	1	—	—	—	—
	鋤先	1	—	—	—	—
	—	—	531〔8号墳 釘2 (実は刀子?)〕	刀子	1	図8-6
	杯蓋その他須恵器片	若干	518〔No.8 古墳 (前田氏採集)〕	壺片	1	図8-7
3号墳	釘	若干	—	—	—	—
	金環	2	536-1〔信太山 No.9 j-1〕 536-4〔信太山 No.9 j-4〕	金環 銀環	1 1	図14-1 図14-2
	琥珀製棗玉	4	536〔信太山 No.9 j-2〕 537〔信太山 No.9 J-7 棗玉〕 538〔信太山 No.9 J-8 棗玉〕	棗玉	1 小片 小片	図14-3 — —
	銀丸玉	3	536〔信太山 No.9 j-3〕	空玉	1	図14-4
	ガラス小玉	31	626 (道田池3号墳)	ガラス小玉	1	図14-5
	—	—	526〔41.1.5 No.9 鉄3〕(茎)	鉄器片	6	図15-1
	—	—	533			図15-2
	—	—	528〔41.1.5 No.9 刀②〕(関部)			図15-3
	—	—	533			図15-4
	—	—	533			図15-5
	—	—	533			図15-6
	直刀・鐔	1	527〔41.1.5 No.9 刀①〕	象嵌装大刀	1	図16-1
	柄頭	1	527〔41.1.5 No.9 刀①〕			図16-2
	轡	1	529	素環鏡板轡	1	図17
	長頸壺	2	—	長頸壺	1	図18-1
	短頸壺	4	—	—	—	—
	杯身	1	—	—	—	—
	杯蓋	1	—	—	—	—
	須恵器片	若干	522-2〔9 床遊離〕 522-3〔9 床遊離〕 522-4〔9 床遊離〕 514〔40.12.23 No.9 墳丘中心部〕 522-1〔9 床遊離〕 512〔41.1.5 No.9 スエ②〕 516〔41.1.5 No.9 スエ①〕	杯蓋片	4	図18-2 図18-3 図18-4 図18-5
						図18-6
						図18-7
						図18-8
				壺片	3	—
						—
	釘	若干	535〔1/9 No9 F-13〕	釘	1	図15-7
4号墳	金環	1	536-2〔No10古墳出土の金環〕	銀環	1	図20-1
	—	—	536〔No.10 平玉〕	平玉	1	図20-2
	金銅装圭頭大刀	1	606・607・608・609・610・611	金銅装圭頭大刀	1	図22
	刀子	2	—	—	—	—
	鉄鏃	4	531 531〔75.W-12 矢〕 531〔W-37 矢. 66〕 531〔92 W-23 矢〕	鉄鏃	4	図21-1 図21-2 図21-3 図21-4
	高杯	3	510〔和泉 道田池10号墳〕 509〔和泉 道田池10号墳〕 853〔和泉 道田池10号墳〕	高杯	3	図23-1 図23-2 図23-3
	杯身	1	—	—	—	—
	杯蓋	4	—	—	—	—
	平瓶	1	—	—	—	—
	長頸壺	1	854〔和泉 道田池10号墳〕	長頸壺	1	図23-4
	短頸壺	1	855〔和泉 道田池10号墳〕	短頸壺	1	図23-5
	—	—	519	壺片	1	図23-6
	—	—	519	杯蓋片	1	図23-7
	釘	8+	—	—	—	—

況図、封土断面図及び平面図（A・B は以下、「調査図面」とする。）

C. 道田池 3・4 号墳墳丘測量図

D. 道田池 1・2・3・4 号墳調査写真（以下、「調査写真」とする。）

E. 森浩一氏直筆日誌（以下、「森日誌」とする。）

一見して分かるように、遺構図など遺物の詳細な出土状況を知る上で極めて重要な資料が存在する。また、森日誌には、当時の調査状況が丹念に書き留められており、本稿でも活用することとしたい。

また、当時の発掘調査に参加した田中英夫氏から、田中氏が記した調査日誌のコピーを寄贈頂いた。この日誌についても、論文末に掲載し引用した（史料 2）。

2. 本報告における整理の方針

以上の状況を踏まえ、本稿では出土遺物・調査写真・調査図面・森日誌の調査に基づき、各古墳の調査の復元を行った。

ただし、その状況を「復元」するに当たり、調査の当事者の解釈と筆者の解釈が混じり、誤解を与える危険性が孕む。そのため、論文末に『概報』における調査担当者の報告原文を抜粋して掲載した（史料 1）。第 3 節における各古墳の遺構・遺物の出土状況は、あくまでも『概報』を基に筆者が再構成したものであることを了承頂きたい。また、本報告は出土資料の報告が本来の目的であるため、遺構の再解釈は遺物の出土状況に関わる最低限にとどめた。

第 3 節 道田池古墳群調査報告

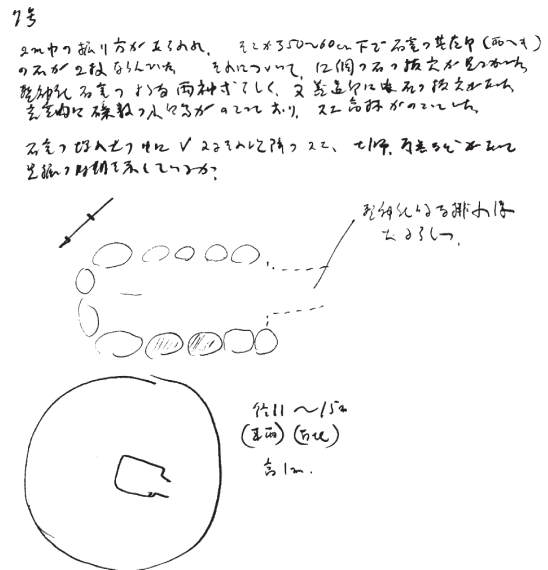
1. 道田池古墳群の調査の期間と体制

調査は1965年の12月22日から1月10日（12月31日～1月3日は年末年始休み、6日は休み）までの15日間実施された。ただし、12月23・28日は雨天のため現場作業を休止しており、実際の現地調査日数は13日となる。

2. 道田池 1 号墳

（1）調査の期間と体制

1 号墳は12月24日に草刈りが行われ、26日の午後から墳形測量が開始された。しかし、その後の調査状況は不明である。



（文字起こし）

2 m巾の掘り方があらわれ、そこから50～60cm下で石室の基底部（西へキ）の石が2枚ならんでいた。それについて、12個の石の抜穴が見つかった。

聖神社石室のような両袖式らしく、又羨道部にも石の抜穴があった。玄室内に礫数の小部分がのこっており、スエ高坏がのこっていた。

石室の埋れ土の中にV又はその以降のスエ、土師、瓦器などがあって盗掘の時期を示しているか。

図 3 森日誌に示された 1 号墳の調査状況

(2) 墳丘と埋葬施設

1号墳は、古墳群の最南端に位置し、2号墳と隣接して築造されている。半径約11m、高さ（現高）0.8mの円墳であり、主体部は横穴式石室である。石室を構成した石材は、西側壁最下段の2石を残して全て抜き去られているが、地山を約60cm掘りこんだ土坑の底部に、側石を抜き取った痕跡が残り、もともとは全長9m、玄室長4.5m、幅1.5mほどであったと考えられる。玄室底面には栗石を敷き、羨道部の底は断面U字形に地山を掘り凹め、羨門側に向けて傾斜をつけており、報告者は排水溝の可能性を想定している。

(3) 遺物の出土状況

内部が完全に攪乱されていたため、遺物は鉄器の断片と須恵器片（長頸壺・高杯等）を若干数検出したのみである。また、石室の埋土には、新しい時期の遺物が出土したことが森日誌に記されており（図3）、盗掘時期を示す可能性が指摘されているが、詳細は不明である。

(4) 出土資料

1号墳に帰属する遺物は、館蔵されていなかった。

3. 道田池2号墳

(1) 調査の期間と体制

2号墳は12月25・26日に墳形測量が行われた。しかし、その後の調査状況は不明である。

(2) 墳丘と埋葬施設

2号墳は1号墳の北東約37.5mに位置し、直径約14m、高さ1m弱の円墳である。墳丘測量図を見ると、南東側に続く斜面地の平坦面に築造されているようである（図4）。そのほぼ中央に設置された主体部は、南北長3m、幅2.45mの方形に近いプランを呈し、周囲には上部を内傾させた丸太痕が北辺に17本、西辺に19本並ぶ（図5）。奥壁に当たると考えられる北辺側の柱痕の傾斜はわずかであるが、両側壁に沿う柱痕は約48度の急傾斜で内側に傾く。檣壁の高さは、北辺で約80cmまで残存していた。

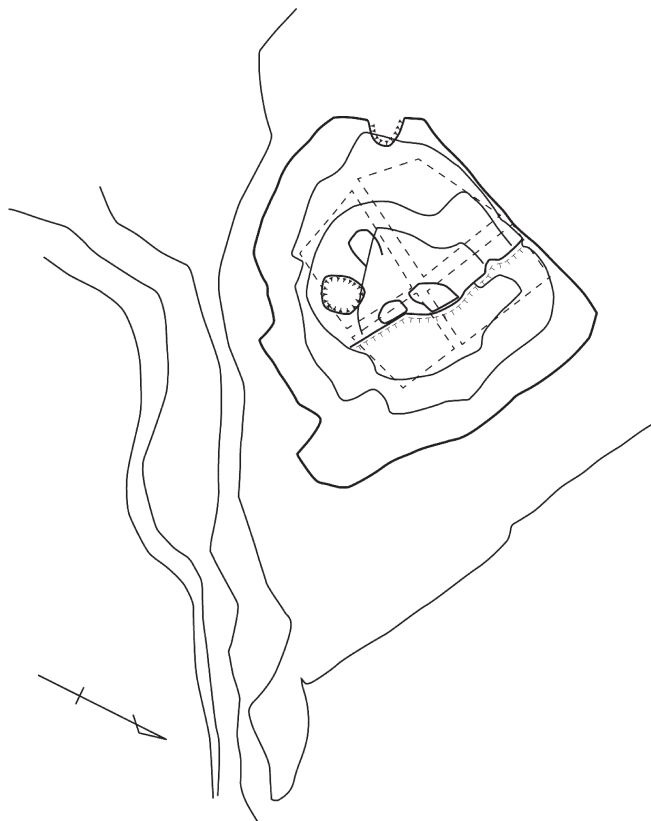


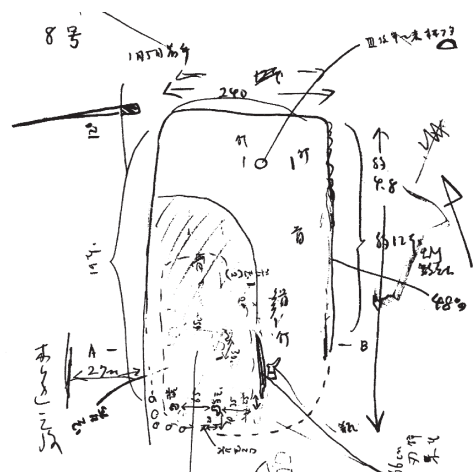
図4 2号墳墳丘測量図（スケール不明、原寸の20%）



図5 2号墳遺構平面図（スケール不明、原寸の20%）

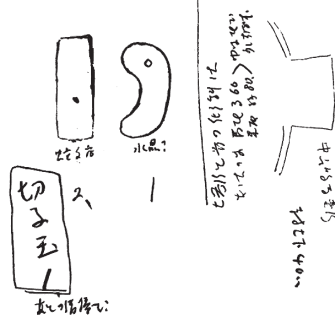
（3）遺物の出土状況

遺物の出土状況については、調査図面や森日誌の記載から、奥壁側に釘・骨・須恵器の杯蓋、開口部付近にて須恵器片・鉄刀・装身具類が出土したとされている（図5・図6）。この状況について、森氏は『概報』において、「床は2面が認められ第2次埋葬に際しては、第1次埋葬の火葬骨片と副葬品を一たん外部にとり出してから火葬を行ったらしい。ところが、その過程で槨が崩落したとみえて、第1次埋葬遺物と推定されるものの大部分が崩落した槨壁の上部にまとめて安置されていた。そ

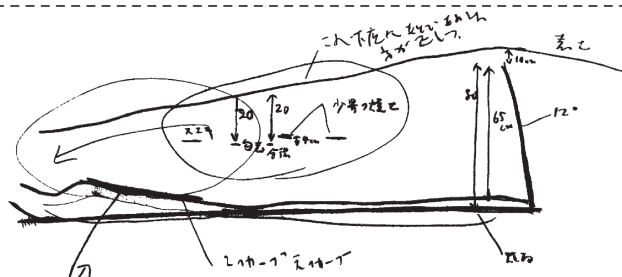
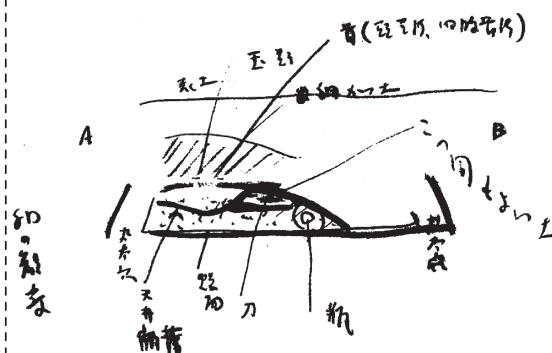


(文字起こし)

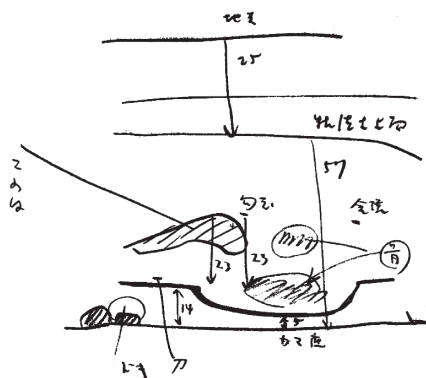
- ①カマの北東に南北においた
木棺（骨と環）
- ②天井が崩落してからその上へ
追葬か改葬。骨と玉、鉄刀
鉄クワ、これらもすべて
焼けているから改葬の可能性あり
- ③その上へ美しい土つめる
- ④Ⅰ中頃の壺片は焼けていない
- ⑤天井の焼土は3～4で陶器や聖神社ほど厚くない



- ① 板の形を、向かいの板材（背と材）
- ② 天板の前後にウレタン板を貼る。背と材、板の間にウレタン板を貼る。背と材、板の間にウレタン板を貼る。
- ③ ウレタン板を貼る。背と材、板の間にウレタン板を貼る。背と材、板の間にウレタン板を貼る。
- ④ ウレタン板を貼る。背と材、板の間にウレタン板を貼る。背と材、板の間にウレタン板を貼る。
- ⑤ ウレタン板を貼る。背と材、板の間にウレタン板を貼る。背と材、板の間にウレタン板を貼る。
- ⑥ ウレタン板を貼る。背と材、板の間にウレタン板を貼る。背と材、板の間にウレタン板を貼る。



- ① 天井上へ改め
追葬
- ② その時はタキロが
たっていた
- ③ 刀、玉の上へ
土の上へ
タキロが北へたお（れる力）
- (文字起こし)
- ① 天井の上へ改め or
追葬
- ② その時はタキロがたっていた
- ③ 刀、玉の上のよい
土の上へ
タキロが北へたお（れる力）



刀と、句を合はせしう。あて 23 のり美かきなり
ニ、断るなりけし。つよにて、句を合はせし
そへし。あふ 90 まであり。刀や云井
ふゆはろり。カーブ（わな）をねらふこと
同じ。天井前席の上より。
お席の前、仰りうつりと。こころまゝ。あふあり
より、同じく。このわたり。いづる。

(文字起こし)
刀と、勾玉金環との高さ23 cmの差があるが、この断面は刀の北はしでのもので、勾玉、金環はそれより南方90 cmであるから刀や天井崩落面のカーブ(南であがる)を復原すると同じ天井崩落面上になる。なおこの下の天井崩落面は、他の面のと違ってその上をふみかためてあり、固くかつこわれてしまっている

図6 森日誌に示された2号墳の調査状況①

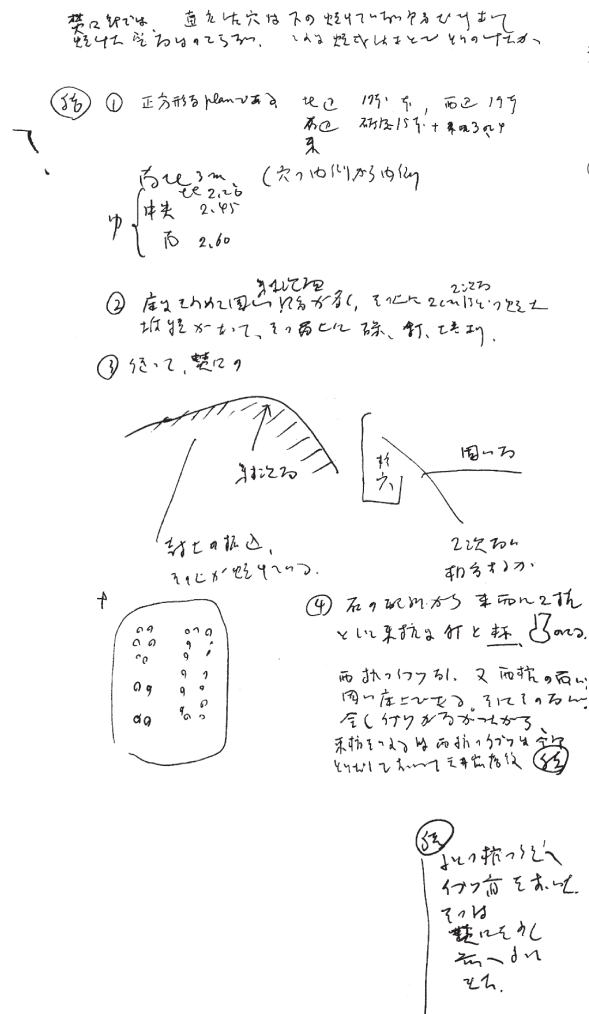


図7 森日誌に示された2号墳の調査状況②

これらの遺物はすべて火熱のために変質していた。」と報告している。この報告の草稿が、森日誌に記載されている。この報告内容について、森日誌に詳細な記載が見られる。

これによると、玄室南西部における須恵器や装身具、鉄刀類を第一次埋葬品、玄室北東部における釘や杯身を第二次埋葬品であると推定している。さらに、その副葬順序として

- ①南西部に第一次埋葬後、火化。
- ②北東部に第二次埋葬。
- ③②と同時に第一次埋葬時の遺物（骨、玉類、鉄刀）を取り上げ、第二次埋葬面の第一次埋葬棺の直上に埋葬し、上へ美しい土をつめる。
- ④南方の焚き口が北へ倒れ、③の良い土の上へ倒れる。

という一連の流れを想定している。

森日誌によれば、まず須恵器瓶が存在する層（A層と仮称する）の上に刀剣・玉類を包含する層（B層と仮称する）が重なっており、更にそれを粘土層（C層と仮称する）が覆っている状況が読み

取れる。南西部の遺物集中部ではA層に須恵器瓶があるのに対し、北東部の遺物集中部では、A層上面に遺物が見られることから、南西部→北東部の順で副葬されたと、森氏は推測している。また、南西部においては、A層に須恵器以外の遺物が出土しないのに対し、B層では刀・玉類などが何れも焼けた状態で出土していることから、森氏は第一次埋葬後に火化を行い、北東部に副葬を行った際に同時に南西部において改葬を行ったと捉えている。よって、A層下面を第一次埋葬面、A層上面を第二次埋葬面、B層を改葬した際の盛り土であると認識しているのである。そして、これらを覆うC層を木槨の崩落層と捉えている。以上が、『概報』において記載された副葬状況の筆者の「再解釈」である。

今回報告する遺物は、玄室南側にある耳環（図8-1）、勾玉（図8-2）、管玉（図8-4,5）、あとの清掃時に出土した切子玉（図8-3）が該当する。刀子・須恵器片の出土状況は不明である。

（4）出土資料

①耳環（図8-1）

銅環である。高さ3.2cm、幅3.2cm、横厚9mm、縦厚8mm。全体的に緑青に覆われており、一部欠損している。鍍金は確認できない。

②玉類（図8-2～5）

2は水晶製の勾玉である。長さ2.65cm、頭部幅1.0cm、胴部幅8mm、厚さ9mm、孔径2mm。片側から穿孔が施されており、穿孔開始面と到達面で孔径が異なる。整形時の稜線を残した粗雑な仕上げで

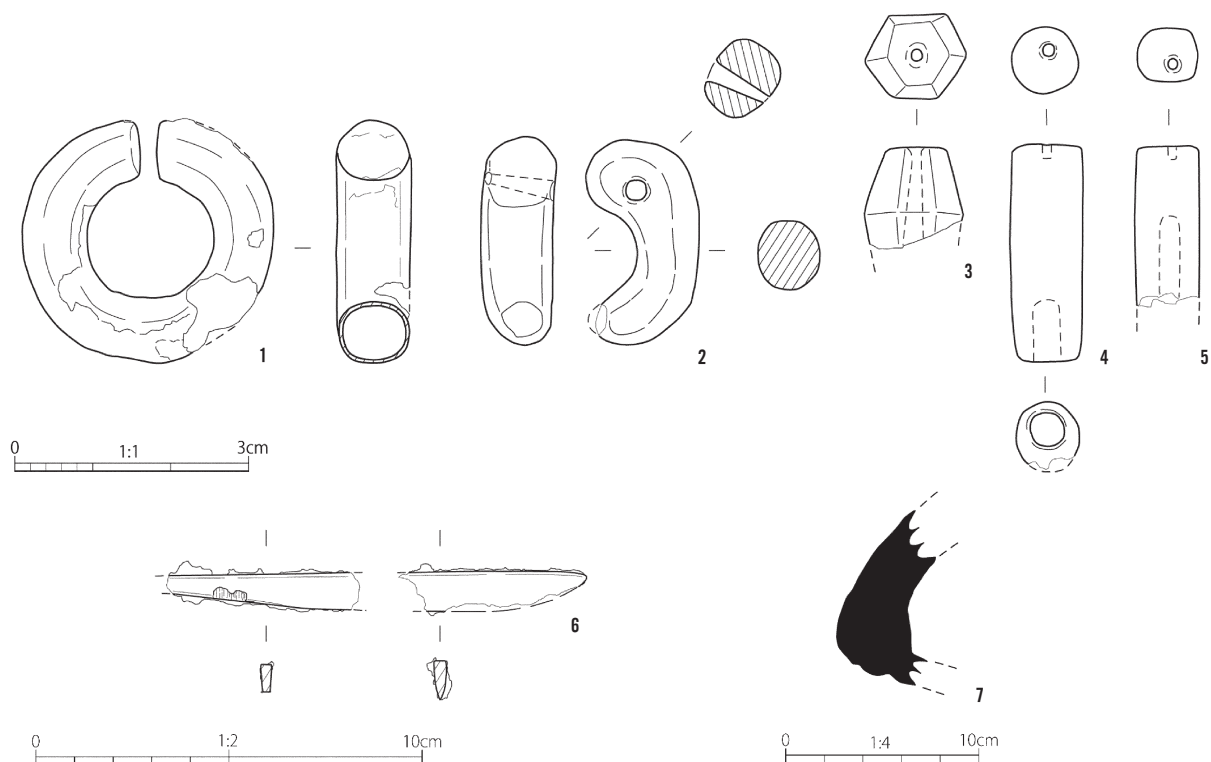


図8 2号墳出土 装身具・刀子・須恵器

ある。溶出などの明瞭な焼痕は見られないが、ヒビが入り内部に煤状の痕跡が認められる。

3は水晶製の切子玉である。残存長1.3cm、径最小1.1cm、最大1.3cm、孔径1.5mm。六角錐台を底面で併せた形状をしており、片面より穿孔されている。穿孔時の軸ぶれが顕著であり、穿孔開始面と破面側で孔径に差異がある。また、下半部が欠けている。

4・5は蛇紋岩製の管玉である。

4は長さ2.8cm、径8.5mm、孔径最小1.5mm、最大4mmで完存している。両面から穿孔が施されるが、未貫通である。

5は長さ2.1cm、径7mm、孔径最小1.5mm、最大2.5mmで下半部が欠落している。4と同じく両面穿孔であり、未貫通である。

③ 刀子（図8-6）

残存長9.8cm、復元長10cm強が想定される。茎部長2.9cm、茎部幅（最大）8.5mm、茎部厚2.5mm、刃部幅1cm、刃部厚3mm。無関で薄造である。鞘木の痕跡は遺存しない。

④ 須恵器（図8-7）

甕の小片であり、内面下部には同心円文タタキが認められる。

4. 道田池3号墳

（1）3号墳の調査状況

3号墳の発掘調査は、約3週間にわたって行われている。

12月22日より以前（おそらく12月20日）から、4号墳とともに墳丘測量が行われ、24日に完了した。その後、25日に発掘調査が開始され、墳丘の中心部で直交する20cm幅の壁を残して全面発掘が行われた。26日には表土めくりが行われ、表土下50cmの黄灰色粘質土上に須恵器破片と河原石が現れたことが記録されている。27日には、墳丘の中心部が大きく掘削され、主体部が完全に破壊されていることが判明した。

その後、1月5日に主体部から石材をほとんど運び出した横穴式石室であることが判明し、床面と石材の抜き取り痕の検出を行っている。7～9日にかけて遺物の配置図を作成と取り上げを行い、最終日の10日に羨道先端の延長部の地山の掘り方の検出を行っている。

（2）墳丘と埋葬施設

3号墳は、直径約15m、高さ1.2mの円墳状を呈するが、石室がかなり東へ偏在していることから、もとの墳丘規模が発掘調査時よりも大きかったと考えられる。石室は全長5.1m、玄室長2.4m、幅1.2mほどの片袖式であった。

3・4号墳の墳丘測量図が残っており、筆者がトレースしたものが図9である。これによると3号墳は北東側に続く丘陵地の平坦部に築造されたことが伺える。一方で、後述する4号墳はその丘陵部



図9 3・4号墳墳丘測量図（スケール不明、原寸の20%）

の頂上部ではなく斜面上に築いており、3・4号墳の築造位置には差異が見られる。

（3）遺物の出土状況

1号墳同様、横穴式石室の石材をほぼ完全に抜き去られているが、床面の遺物の残存状況は比較的良好である。

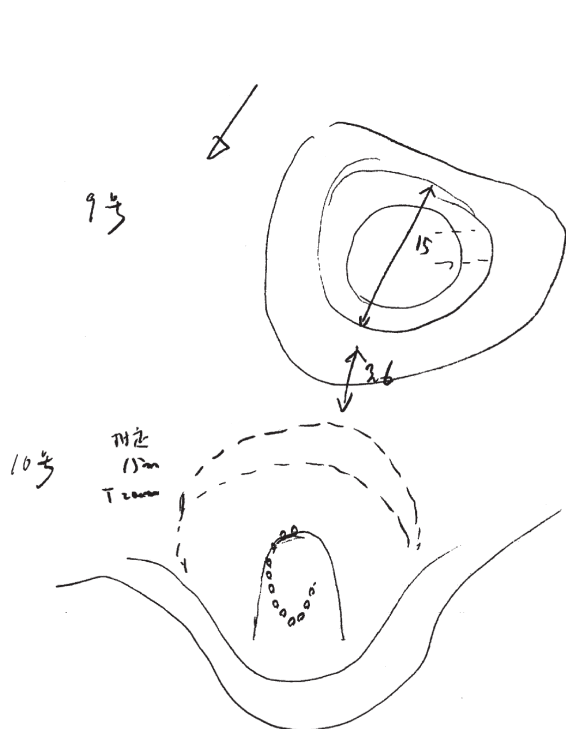


図10 森日誌に示された3・4号墳の調査状況

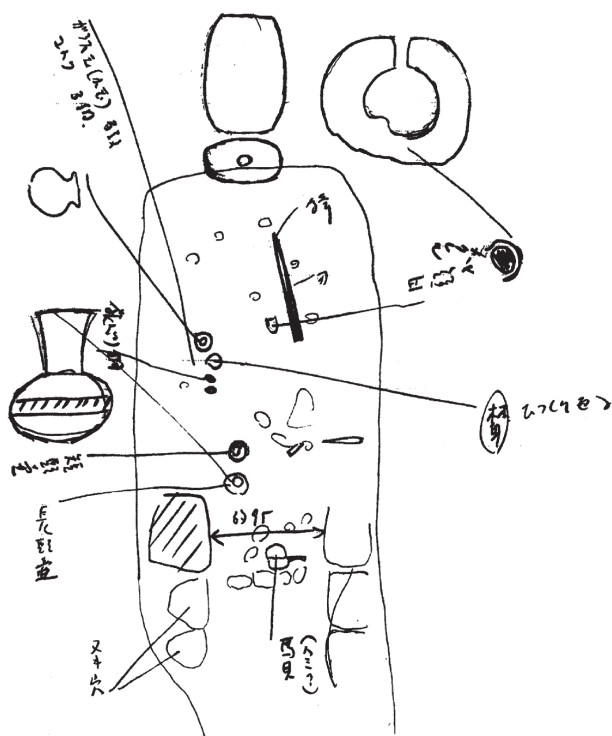


図11 森日誌に示された3号墳の調査状況

森日誌、調査写真、調査図面で詳しい出土状況が確認できる。森日誌によると、石室奥壁部に象嵌装大刀、石室中央部の礫集中部に釘、須恵器、装身具類、その手前に轡、羨道側に須恵器が出土していることがわかる（図11）。

象嵌装大刀は、刀身（図16-1）と柄頭（図16-2）が離れて出土している。石室中央部の礫集中部では、調査写真から脚付長頸壺（図18-1）や短頸壺などの須恵器が正立した状態で出土していたことがわかる。また、装身具（図14）については、別個に出土状況図が作成されている。これによると棗玉、空玉、ガラス玉は元々一連のものであった可能性が高い（図12）。羨道部近くで出土した轡については、調査写真を見ると、環板と引手・銜が折り重なった状態で検出されている。また、その南側では短頸壺や脚付壺の足が出土している。

（4）3号墳の出土遺物

①耳環（図14-1・2）

1は金環である。高さ2.95cm、幅3.25cm、縦厚7mm、横厚7mm。剝落部には緑青が見られ、中実の銅芯であると考えられる。内側面には環状とする際に生じた皺

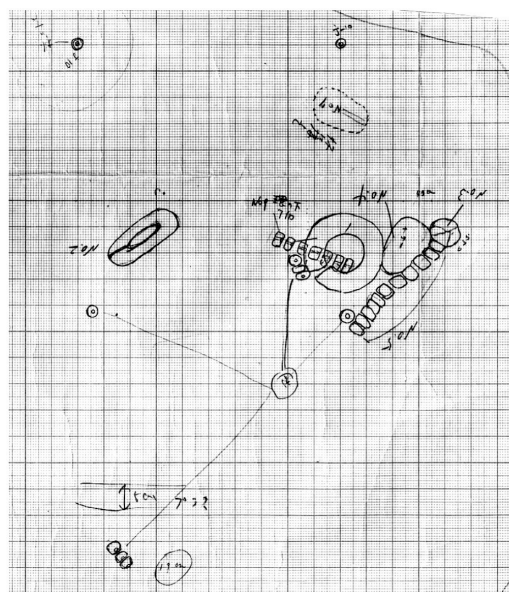


図12 装身具の出土状況図

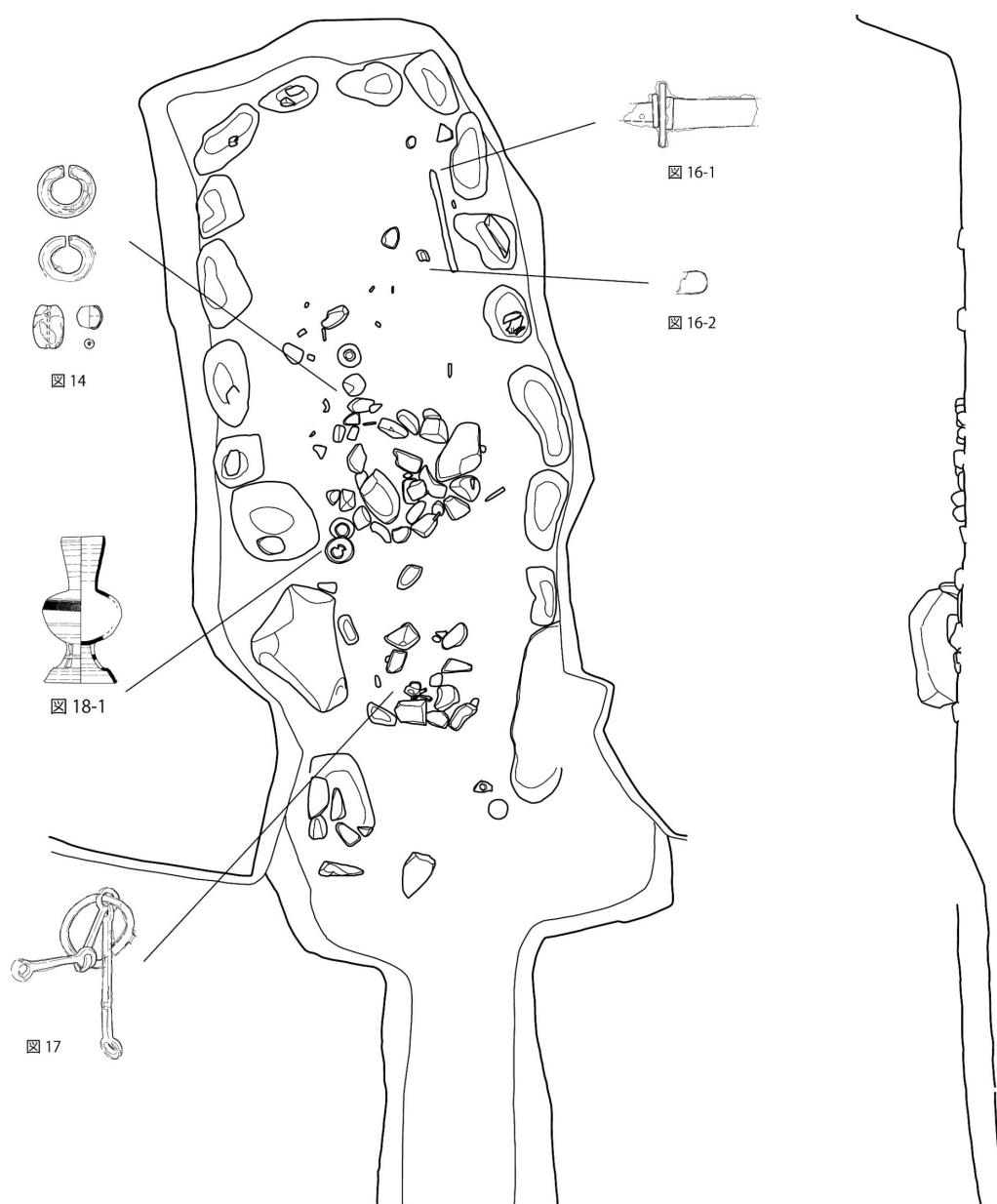


図13 3号墳遺構平面図（スケール不明、原寸の20%）

状の筋と、端面に見られる金薄板を折り込んだ痕跡が見られることから、銅芯金薄板張である。全体的に遺存状況が良い。

2は銀環である。高さ2.85cm、幅3.1cm、縦厚7mm、横厚6.5mm。剥落部には緑青が見られ、中実の銅芯であると考えられる。端面に見られる薄板を折り込んだ痕跡から、銅芯銀薄板張である。1の金環と製作技法が類似することから、おそらく1対となるものであろう。

②玉類（図14-3～5）

3は琥珀製棗玉である。高さ2.45cm、幅1.75cm、厚み1.3cm、孔径2～3.5mm。上下面共に穿孔部に

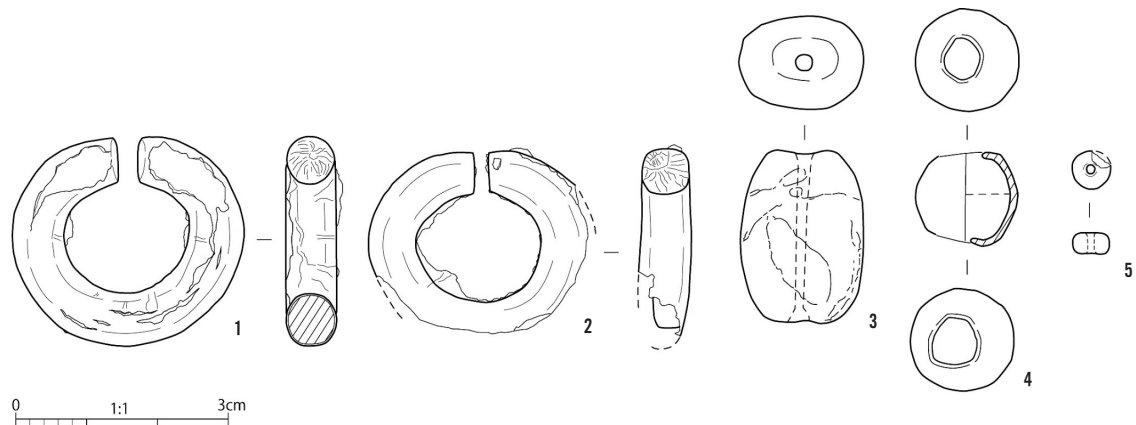


図14 3号墳出土 装身具

挿鉢状の痕跡を残すことから、両面穿孔であると考えられる。また、穿孔部には平坦面を持つ。

4は空玉である。高さ1.35cm、幅1.45cm、厚み1mm、孔径5～6mmである。

5はガラス製の小玉である。薄青色であり、幅5mm、厚み3mm、孔径1mm。一部欠損が見られる。また、小片のため実測を行わなかったが、破片が数点存在する。

③鉄器片 (図15)

1は直刀の茎部である。残存長4.5cm、幅最大1.8cm、厚み6mm、目釘孔径3.5mmである。

2は直刀の関部である。残存長5.1cm、刀身元幅2.7cm、茎口幅2.2cm、茎厚さ5mm、刀身厚さ6mmである。片関、斜角である。

3は直刀の関部である。残存長5.6cm、刀身元幅3.6cm、茎口幅2.35cm、茎厚さ6mm、刀身厚さ6.5mmである。両関、斜角であると考えられるが、X線においても関部の痕跡は明瞭には観察できなかった。

4は不明鉄器である。中央にやや歪な鑄が入り、断面は三角形状を呈する。裏スキの痕跡がやや見られることからヤリガンナの刃部の可能性がある。残存長3.5cm、幅2.3cm、刃部厚4mm。

5・6は直刀片の可能性がある鉄製品であるが、全面が破面である。

7は釘と考えられる資料である。残存長5.8cm、厚さ7.5mm～1cm。両面に直交する木目が付着し、棺に由来する痕跡であると考えられるが、判然としない。

④象嵌装大刀 (図16)

1は鍔付鉄刀である。鉄製の鍔・鍔・柄縁金具に銀象嵌を施した銀象嵌装無窓鐔付大刀である。反りのない直刀であり、関は不均等両関、斜関である。茎は残存長5.6cm、茎部厚6.5mmであり、茎元幅は最大2.45cm、残存する先端で2.15cmと茎尻に向けて直線的に細くなる。ただし、茎元の正確な形状はX線でも判然としない。また目釘も確認されなかった。刃部は残存長9.5cm、刃身元幅3.4cm、刃部厚7.5mmである。

鍔は、無窓鍔であり、面と耳に象嵌が施されている。長径7.3cm、短径6.05cmの倒卵形であり、厚

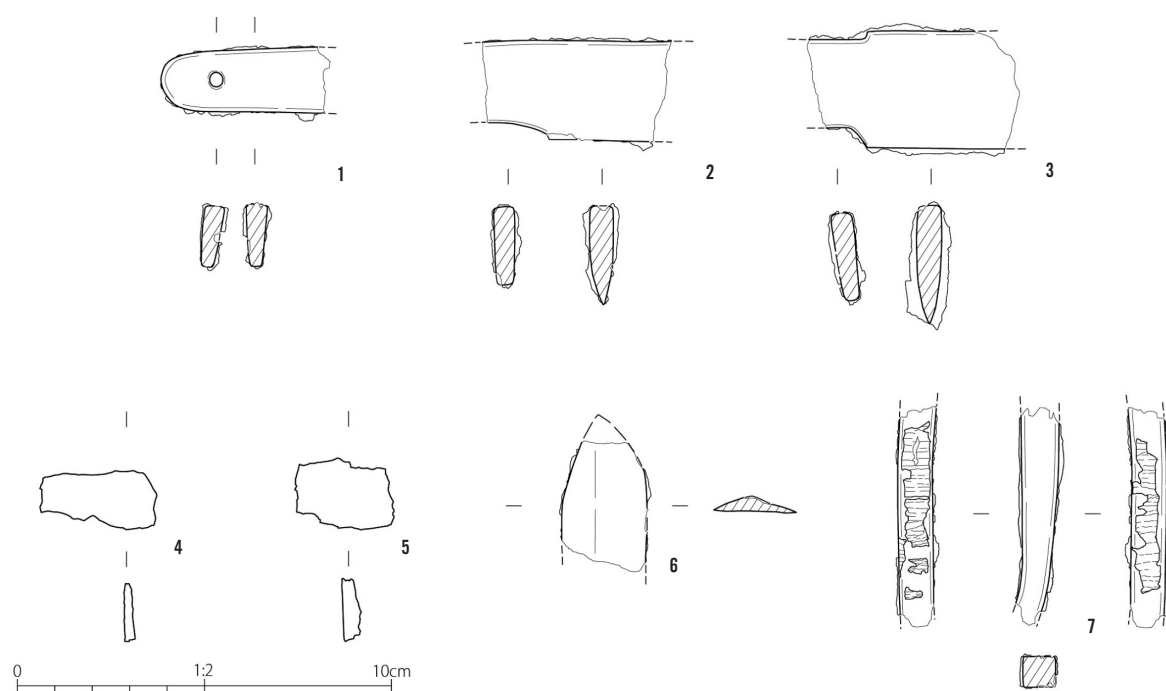


図15 3号墳出土 鉄器片

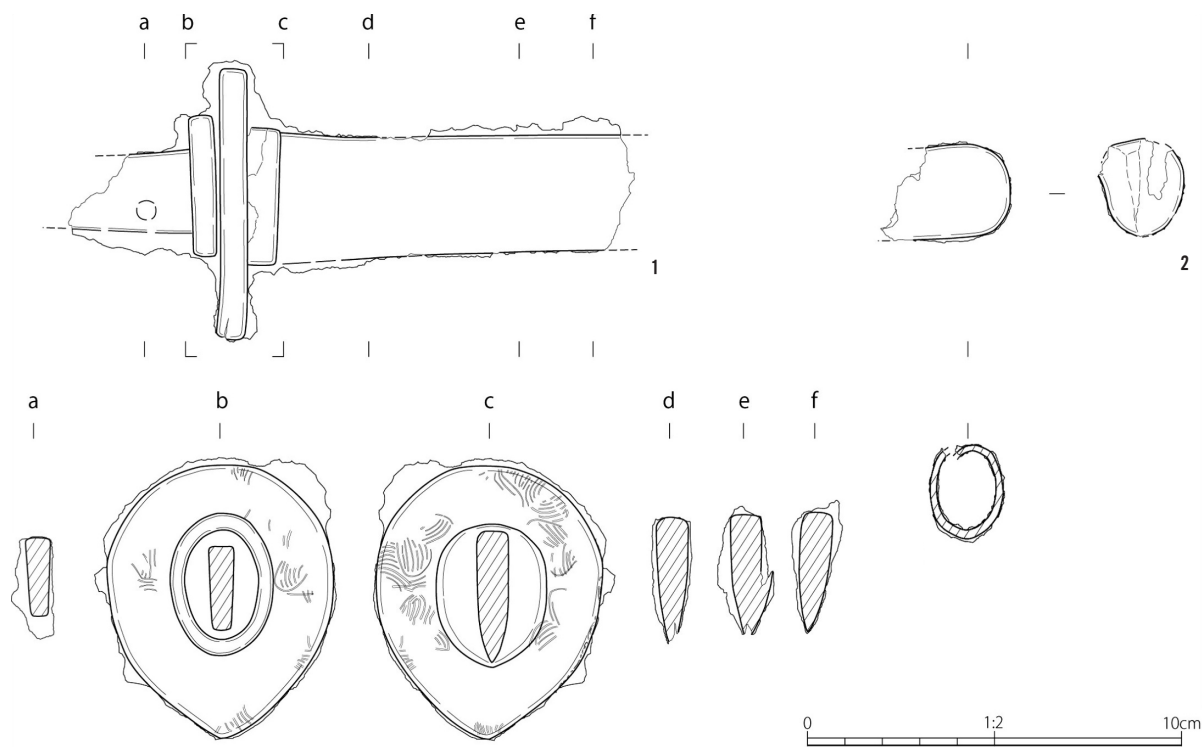


図16 3号墳出土 銀装象嵌大刀

さは7.5mmである。鐙の象嵌文様は、耳の部分には二重丸の文様、鐙の両面にはハート形文を刻む。象嵌は面の一部にしか認められないが、遺存している文様の配置間隔から、ハート形文は一面に対し6単位存在したと考えられる。また、ハート形文の中は斜線で埋め、その周囲をU字形文や弧線で埋めていることから、線充填系列の斜線型（大谷2018）に該当する。

釦は、堰板のある閉塞式である。X線で側面にも象嵌痕跡が認められたが、詳細は不明である。長さ8mm、長径3.6mm、短径2.6mmの楕円形である。

柄縁には太さ6.5×6.5mmの貴金具があり、長径3.8cm、短径2.7cmでその形状は下端がやや細る楕円形である。茎の背は柄縁金具に接しており、茎は落とし込み法で柄木に装着されたと考えられる。また、X線で側面に象嵌痕跡が認められたが、詳細は不明である。

2は、『概報』において柄頭とされていたが、鞘尻金具である。残存長3.45cm、幅2.45cm、厚さ2mmであり、象嵌は施されておらず丸尾である。

⑤ 馬具（図17）

環状鏡板付轡で、長方形矩形の造付（鍛接）立聞金具をもつ。1は、鏡板・引手・銜2点が銹着した状態で遺存している。

1-1は引手であり、太さ1.0cm、断面方形の柄部に、径2.5cmの外環が取り付けられている。引手長は17.6cmで柄に強い捩りを加えず、外環を柄部に対して約40度屈曲させる、くの字引手である。内環は径2.5cmである。

1-2・3は銜である。1-2は1-4の環板に接続する銜であり、銜長10.1cm、外環直径3.15cm、内環直径2.0cmである。太さ9mm、断面方形の柄部に、90°捩った内環が取り付く。1-3は、残存長8.8cm、内環直径2.35cmである。柄部は太さ8.5mm、断面方形であり、無捩銜である。

1-4は環板であり、太さ8mm、断面多角形の鉄棒を成形した幅9.2cm×高さ7.4cmの環体に、矩形の立聞がつく。立聞は、遺存状態が悪いが基部のみ遺存する。

また、轡の破片と考えられる資料が他に2点存在する。

2は1cm×7.5mmの棒状鉄器で、矩形を呈することから環板片であると考えられる。

3も同じく1cm×7.5mmの棒状鉄器で、矩形を呈することから環板片であると考えられる。

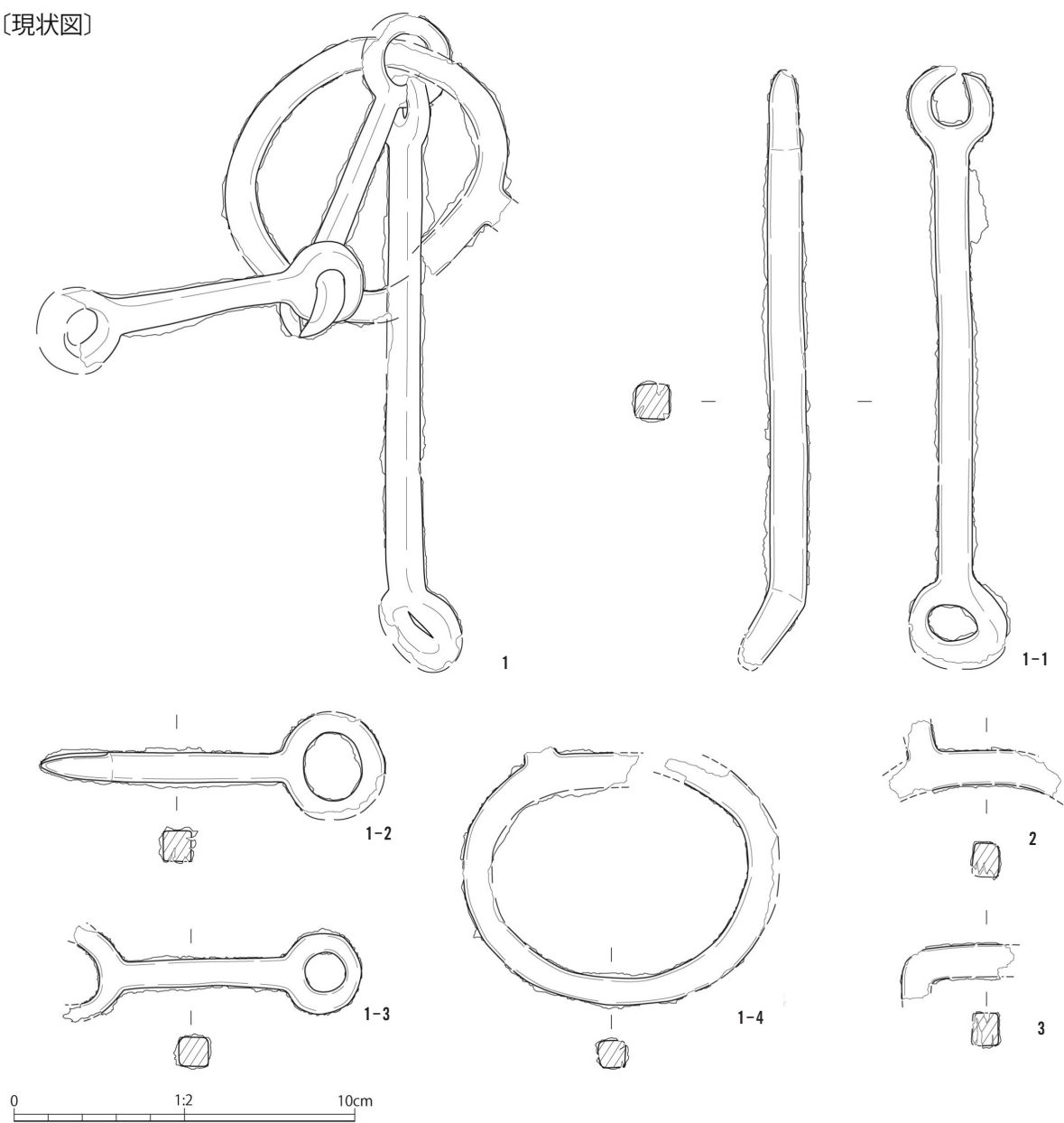
轡の遺存状況から、3は1-1の環板とは接合せず、もう一つの環板の一部であると考えられる。2は不明であるが、法量は3と近似することから、同じくもう一方の環板を構成していた部材の可能性が高い。

以上の検討を元に考えると、本来の轡は図17下段のような構造であったと推測できる。

⑥ 須恵器（図18）

1は、脚付長頸壺である。口径9.3cm、器高33.0cm、体部最大径17.8cm、脚底部径16.4cm。頸部は細く口縁部近くから直立する。体部は算盤型であり、やや上位に明瞭な稜がつき、その稜には1条の沈線がつく。その上部には2条の沈線が付き、その間に斜位の刺突文が施される。脚部は屈曲しなが

〔現状図〕



〔展開図〕

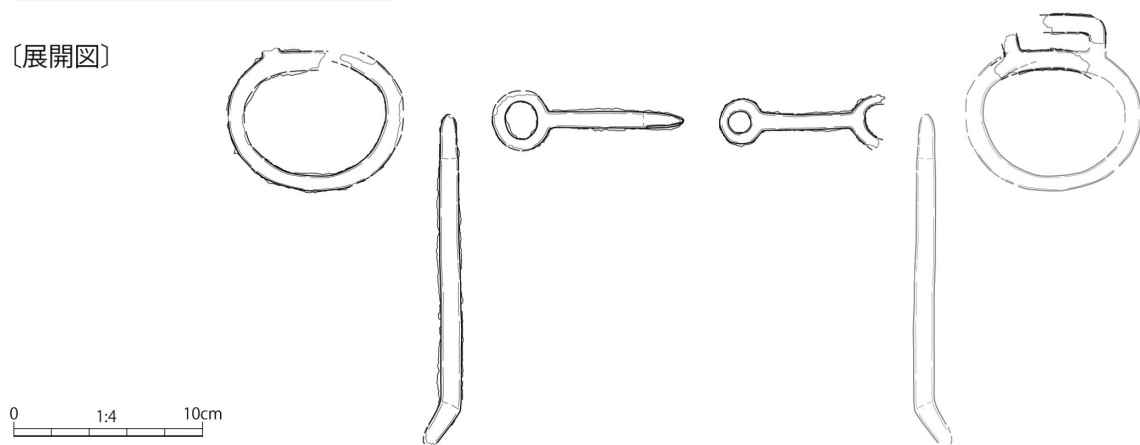


図17 3号墳出土 馬具

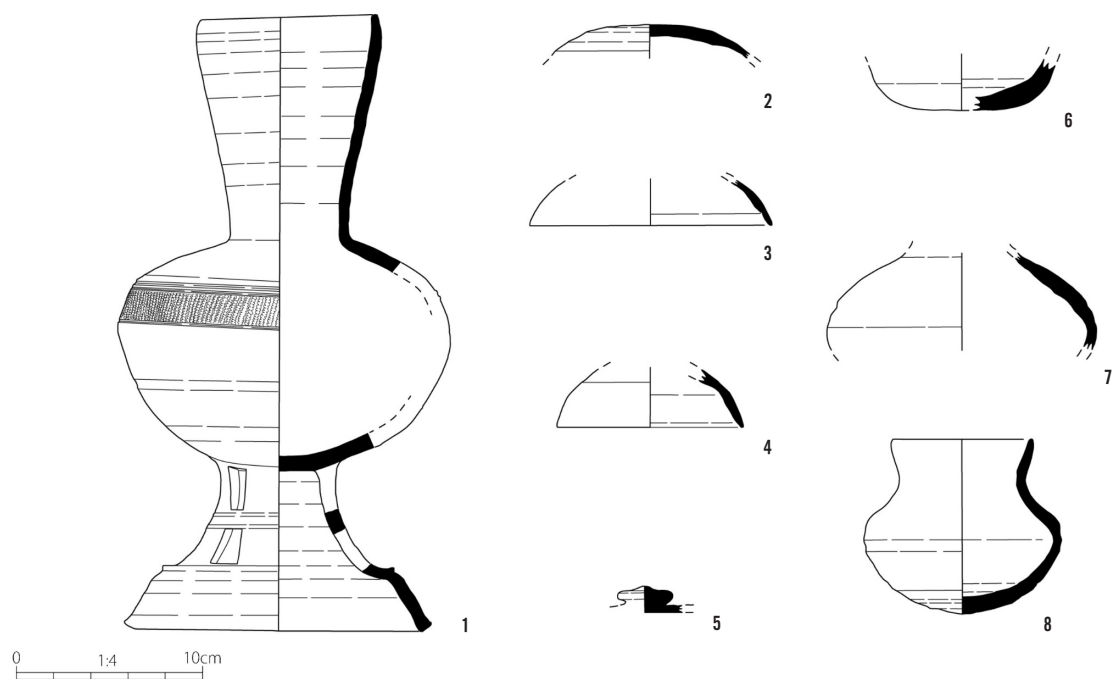


図18 3号墳出土 須恵器

ら底部につく。端部は外傾し、屈曲部と脚部中位の沈線間に2段にわたり、3方の長方形透かしがつく。

2～5は杯蓋である。注記から、2～4は「床遊離」、5は「墳丘主体部」から出土していることがわかる。

2は天井部の破片であり、外面にはヘラケズリが施される。

3は口縁部の破片であり、口径13cm程に復元できる。内外面ともに回転ナデが施される。

4は口縁部の破片であり、口径10cm程に復元できる。内外面ともに回転ヘラケズリが施される。

5はつまみ部の破片である。つまみは中央が高くなっており、やや扁平状の形状のものである。

6～8は壺である。注記から、6の出土状況は「床遊離」であることがわかる。7、8は不明である。

6は壺の底部であり、底部は未調整である。

7は短頸壺の胴部であり、胴部径14cm程に復元できる。

8は短頸壺であり、口径7.4cm、胴部径10.6cm、器高9.2cmに復元できる。胴部上半から肩部がやや張り、頸部は直立気味に立ち上った後、口縁部中位よりやや内湾した形態を示す。底部は器壁がやや厚く、外面は回転ヘラケズリによって丸く仕上げられている。

5. 道田池4号墳

(1) 調査の期間と体制

4号墳は、12月24・25日に測量が行われ、25日の午後から発掘作業が開始された。この時攪乱層か

ら金環が発見されている。26日には柱穴が検出され横穴式木室の構造が明らかとなり、27日には床面の検出作業まで完了している。

その後、29・30日に遺構平面図や遺物の取り上げが行われ、調査は終了した。

(2) 墳丘と埋葬施設

4号墳は、3号墳の北西に位置するが、全く墳丘を残さず、外形実測では高さ20cmの等高線が一本走る程度である。墳丘らしき周囲には、塹壕が掘りめぐらされて現状をとどめないが、直径約15mの円墳であろうと考えられる。外部施設は全く認められなかった。内部主体は横穴式木室であるが、木槨内は火熱を受けていない。長さ4.7m、幅2.4m、高さ（現存）0.5mである。柱穴は45本を確認し、そのほとんどが10×15cmの丸太棒であるが、中には半截の丸太も確認された。主体は地山を掘りくぼめて床面をつくり、掘方より25～40cmのところに柱穴を並べている。丸太の設置角度は20度ぐらいのものが多かったそうである。

(3) 遺物の出土状況

遺物の出土状況は、木槨の奥に杯、鉄鏃、釘等の一括遺物が、また木槨中央の左寄りに須恵器の一群（高杯、平瓶、長頸壺、杯等）が検出された。そして、焚口に相当する部分の右側隅より金銅装圭頭柄頭、鍔付直刀、靱尻金具、須恵器の高杯や杯等が出土した。主体中央は塹壕のため攪乱されており遺物の検出はなかったが、攪乱層中より須恵器片が若干と金環1個が表土直下より検出された。

4号墳に関しては、遺構の実測図面は残っていないが、写真と森日誌における記載が見られる（図19）。

これによれば、『概報』における「カマ形木槨奥の方に杯、鉄鏃、釘等の一括遺物」に該当する館蔵資料として、鉄鏃（図21）が考えられるが詳細な出土状況は不明である。「カマ形木

中央の左寄りに須恵器の一群（高杯、平瓶、長頸壺、杯等）」に該当する資料は、森日誌の略図や調査写真から高杯（図23-2・3）、長頸壺（図23-4）が考えられる。そして「焚口に相当する部分の右側隅より金銅装圭頭柄頭、銅鐔付直刀、靱尻金具、須恵器の高杯や杯等」に該当する資料が、圭頭大刀（図22）、高杯（図23-1）と考えられる。また、『概報』では触れられていないが、焚口部左手にある短頸壺についても該当する遺物が存在する（図23-5）。須恵器片と平玉の出土状況は不明である。ま

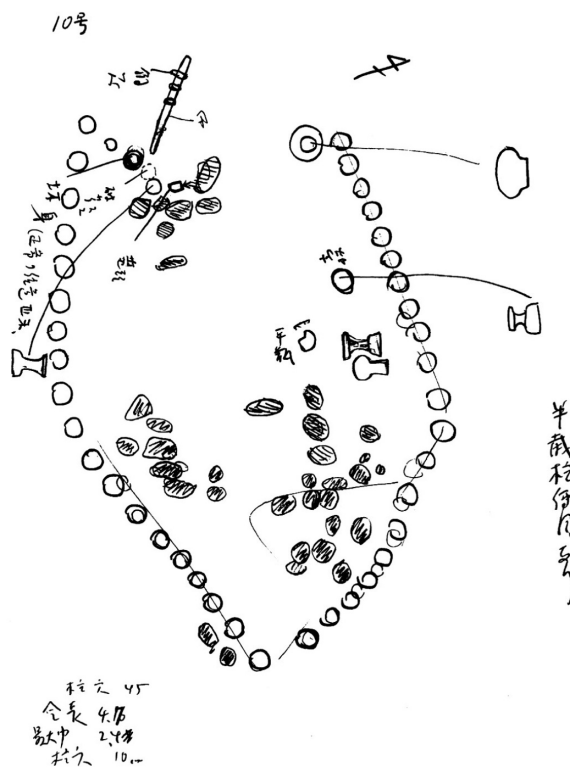


図19 森日誌に示された4号墳の調査状況

た、奥に釘や鏃が存在する一群があることから初葬の片づけ痕跡の可能性はあるが、判然としない。

(4) 出土遺物

① 耳環 (図20-1)

金環である。高さ2.8cm (残存2.6)、幅3.2cm (残存3.1)、縦厚6mm、横厚6mm。下半部が欠落し、内部の銅芯が露出している。緑青が見られ、中実の銅芯であると考えられる。内側面には環状とする際に生じた皺状の筋と、端面に見られる銀薄板を折り込んだ痕跡が見られることから銅芯銀薄板張であると考えられる。

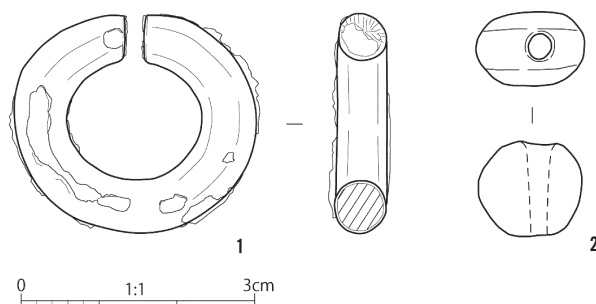


図20 4号墳出土 装身具

② 玉類 (図20-2)

水晶製の平玉である。高さ1.25cm、幅1.3cm、厚み1.0cm、孔径2～3mm。穿孔部は上部のみ挿鉢状になる。

③ 鉄鏃 (図21)

1は、短頸ナデ関柳葉形鏃であり、短い頸部を持ち、鏃身部が柳葉形、鏃身関がナデ関を呈する個体である。鏃身部長5.2cm、鏃身部幅2.2cm、頸部長2.95cm、茎部長 (残存) 1.65cm、厚さ3mm。鏃身部は側縁が内湾して鏃身関に至る。鏃身部断面形態は平造であり、表裏の両面から刃が研ぎだされる。頸部関は台形関である。

2は、長頸柳葉形鏃であり、鏃身部は細長く、側縁は直線的な形態である。鏃身部長2.45cm、鏃身部幅1.1cm、頸部長7.7cm、頸部幅5.5cm、茎部長 (残存) 1.4cm、厚さ4mm。鏃身部断面形態は表面から研ぎだされた片丸造で、鏃身関は角関である。頸部関は棘状関であり、下の茎部には矢柄の有機質が残存している。

3は、鉄鏃の頸部から茎部であり、長頸柳葉形鏃であると考えられる。頸部長 (残存) 6.7cm、頸部幅7mm、茎部長 (残存) 2.1cm、茎部幅6mm、厚さ4.5mm。頸部関は棘状関である。

4は、鉄鏃の頸部から茎部である。頸部長 (残存) 2.0cm、頸部幅7mm、茎部長 (残存) 5.5cm、茎部幅6mm、厚さ4.5mm。頸部関は台形関であり、茎部には矢柄の樹皮が遺存する。

④ 金銅装圭頭大刀 (図22)

圭頭柄頭と大刀本体が離れて出土したが、ほぼ完形であり、刀の拵えが良好に遺存する資料である。

柄頭は圭頭柄頭で、柄間は糸巻、鐔は無窓鐔・鉈・責金具で構成され、鞘は足金具、鞘尻金具を伴う構造である。佩用方法は、足金具が2個体伴うことから横佩である可能性が高い。

大刀本体は反りのない直刀で、カマス切先である。関は不均等両関でありナデ関である。茎は茎尻

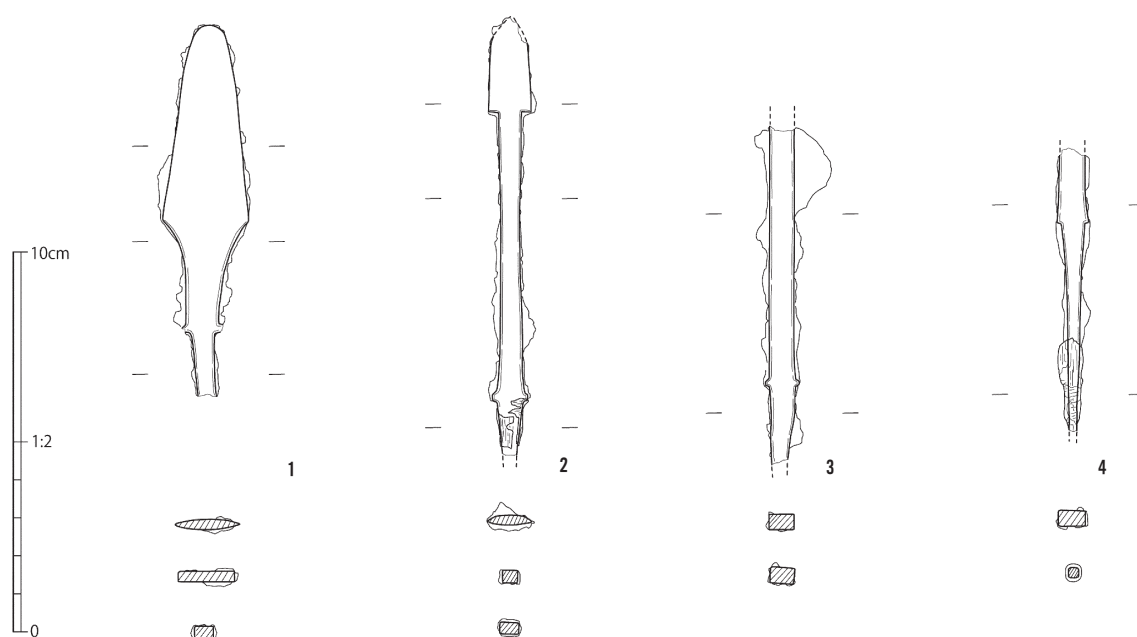


図21 4号墳出土 鉄鍬

に向かって先細り、茎尻は丸く成形されている。茎尻先端から1.9cmの所に直径5mmの目釘孔が穿たれ、鉄製目釘が残存している。全長72.4cm、茎長さ10.3cm、刀身長さ61.7cm、刀身元幅2.8cm、茎口幅2.3cm、刀身厚さ7mm、茎厚さ5.5mm、茎幅1.9cm、中幅2.4cm、先幅不明である。

柄頭の構造は、木製圭頭形柄頭に銅板を佩表、佩裏に当て、それを圭頭形の覆輪で覆い、柄頭貴金具で固定する。高さ6.35cm、幅3.75cm、厚さ2.1cmであり、覆輪は金銅装、銅板は銀装である。覆輪の山形の切り込みは鋭く、圭頭柄頭の初期のものであろう。懸通孔には金長9mmの鳩目金具が両側から装着されている。鳩目金具は金銅装の筒状金具で、外側部分にはストッパーを兼ねて、折り返しが確認できる。また、柄頭内部には、覆輪に沿う形で、木質が遺存しており、本来は圭頭形に成形されていたものと考えられる。

柄間は、木柄に糸を巻き付ける構造である。鏝から1.9cmの位置に鉄製目釘が残存しており、この目釘は刀茎の目釘孔に打ち込み、これにより木製柄を固定している。その残存長は、表面に遺存している紐巻痕跡（幅約1.0mm）のある銹瘤の幅と同じであるため、本来の柄木の幅を遺存しているものと考えられる。

鏝は、長径5.35cm、短径3.85cmで、下端部が尖る金銅装倒卵形無窓鏝である。断面はT字形であり、内孔も倒卵形である。

鍬も金銅装であり、刃側が窄まる倒卵形である。厚さ0.5mm、長さ1.45cm、長径2.95cm、短径1.8cm。

貴金具は厚さ3mm、長さ2mm、長径3.3cm、短径2.1cmで倒卵形である。鏝・貴金具・鍬は現状銹着しており、貴金具と鏝はやや中心軸がずれて銹ついている。貴金具の観察では、茎の背が柄縁貴金具に接している状況が認められることから茎は落とし込み法で柄木に装着されたと考えられる。

刀身には足金具が2つ取り付けられており、刀身の背に対して佩表側にやや傾く。いずれも金銅装

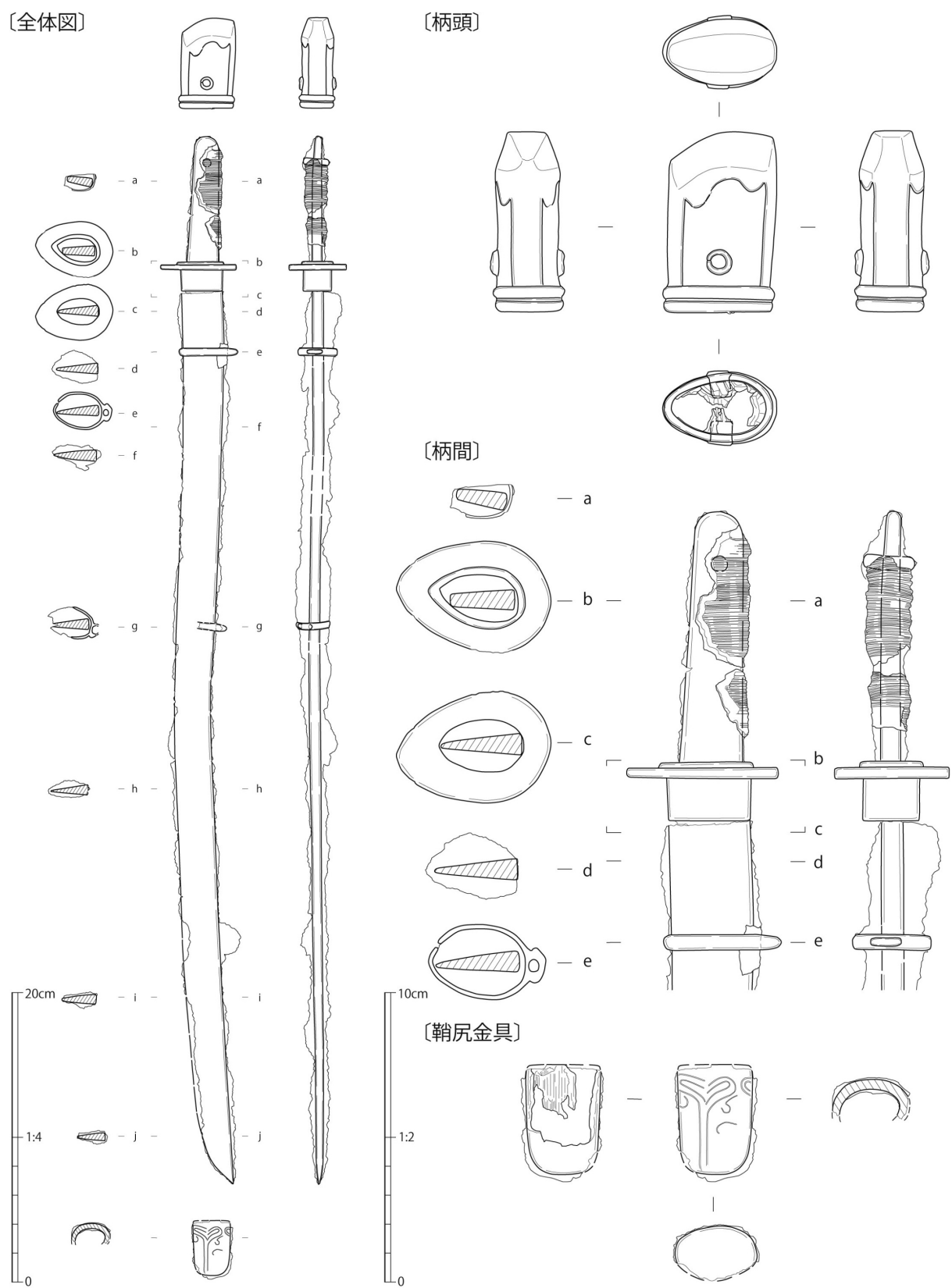


図22 4号墳出土 金銅装圭頭大刀

であるが、吊孔部分が鍛接か一铸かは判断できなかった。完存している一の足は長径4.05cm、短径2.6cm、吊手部孔4×3mmである。鞆の痕跡は明確には認められなかったが、吊金具の内側の径は装着されていた刀身の鞆の幅を反映するものであろう。

鞆尻金具は高さ3.8cm、幅2.55cm、厚み1.9cm（推定）であり、内側には鞆木が遺存している。鉄地であり、断面は倒卵形である。また、表面には心葉文の象嵌が認められる。

⑤ 須恵器（図23）

1は、完形の無蓋長脚無蓋高杯であり、口径11.9cm、器高15.5cm、底部径11.3cmである。杯部外面には稜がめぐる。底部外面は回転ヘラケズリ、底部内面は不定方向のナデが施され、他は回転ナデ調整である。脚部には、中位に2条沈線がめぐり、これを目安に2段2方の長方形透かしを配する。透かしは斜めに深く切り込まれている。

2は、ほぼ完形の無蓋長脚無蓋高杯であり、口径11.3cm、器高16.0cm、底部径10.5cmである。杯部は、底部より水平にのび中位で緩やかに屈曲し外方へ開く。杯部外面には、2本の沈線の間に刺突文が施される。底部外面は回転ヘラケズリ、他は回転ナデ調整であり、内面には丁寧にナデが施されている。脚部は、基部より裾部近くまではあまり外反せず、裾部より大きく広がり端部に至る。脚部には、中位に2条、下位に1条沈線が施され、これを目安に2段3方の長方形透かしを配する。内面は回転ナデ調整、接合部付近にしぼり痕跡が残る。透かしは斜めに深く切り込まれている。

3は、完形の無蓋短脚高杯であり、口径10.8cm、器高6.8cm、底部径8.5cm。脚部は大きく反る。

4は、完形の長頸壺であり、口径7.3cm、器高14.5cm、体部最大径11.9cmである。口頸部は、上半

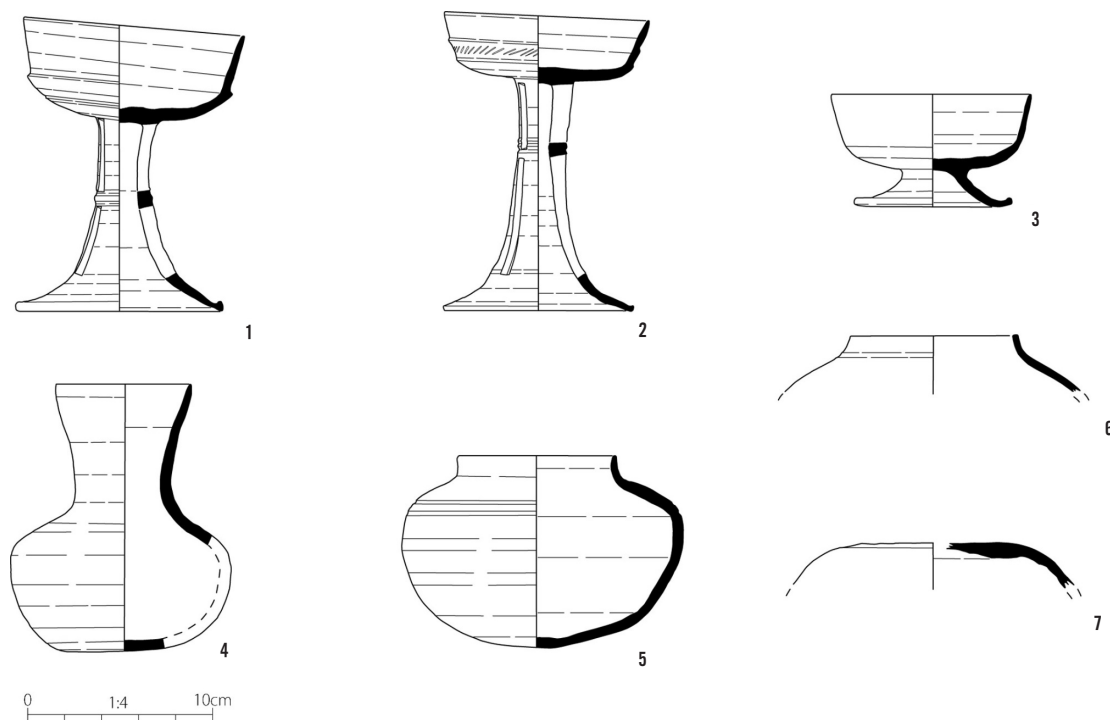


図23 4号墳出土 須恵器

からやや外湾し、底部は平らである。底部にヘラケズリを施す。

5 は、完形の短頸壺であり、口径8.5cm、器高10.4cm、体部最大径15.2cmである。口頸部の基部太く、直立に立ち上がる。また端部は丸みを持ち、底部は丸底である。体部は上位に最大径を求め、肩の張りがややみられる。胴部上半には沈線が2条施される。底部にヘラケズリを施す。

6 は、壺の破片であり、口径は9.4cmに復元できる。蓋を重ね焼きした痕跡が見られる。

7 は、杯蓋の破片であり、天井部は回転ヘラケズリを施す。

6. 帰属不明資料

1 は、刀子である。残存長12.2cm、刀身元幅15.0cmである。刃部と茎部の境に釦を装着し、茎部には柄木の有機質が付着する。

2 は、釘と考えられる資料である。残存長6.7cm、厚み6～8mmである、先細りする。

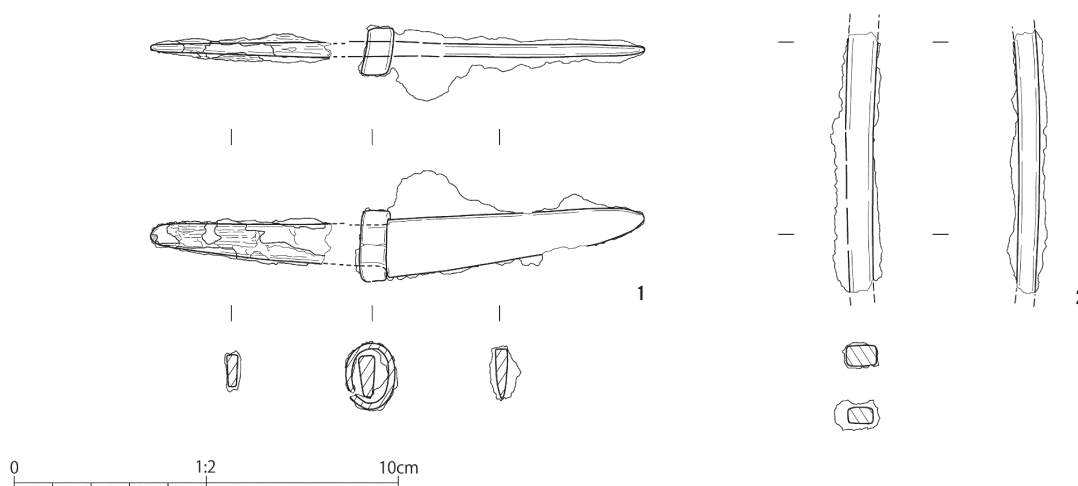


図24 帰属不明資料

第3節 総括

1. 各古墳の時期的位置づけ

最後に、各古墳の時期について遺物の年代を基に若干の考察を加えたい。

1号墳は横穴式石室の構造をとる古墳であるが、出土資料が館蔵されておらず状況不明である。

2号墳は横穴式木室であり、第一次埋葬後火化され、第二次埋葬時に一次埋葬品を改葬する特徴を持つ。小ピットのみから構成される。小森分類のB1類に該当し、和泉地域に共通して認められる構築法である（小森2013）。出土資料は少なく、時期的な問題を取り上げるのは難しいが、玉類や耳環、直刀が出土する状況は、3・4号墳と類似する。水晶製勾玉は平面形態が縦長化し、また製作工程の粗雑化が進行していることから、おそらく後期後半に帰属する資料であると考えられる。

3号墳は、石室の損壊が甚だしいが、おそらく両袖式の横穴式石室である。出土資料を見ると、水

晶製平玉は法量的に通有のもので、大賀編年の後Ⅱ期～後Ⅳ期に属する（大賀2009）。また、鍔付鉄刀はMT15型式期に出現し、TK43～209型式期に盛行する特徴を持つ。また、象嵌鍔に限れば近畿周辺部において出土するのはTK43型式期以降である（瀧瀬・野中1996）。須恵器についてみると、脚付長頸壺は肩の張りが強く、新相の特徴を持つ。杯蓋の口径も小型化しており、TK209型式を前後する様相と捉えられる。以上から、本古墳はTK43～209型式期に該当する古墳であると考えられる。

4号墳は、横穴式木室の構造を持ち、『概報』においても6世紀後半に比定されている。2号墳同様、小森分類B1類の構築法を採る。出土した須恵器は、無蓋高杯においては2段3方透かしと2方透かしが混在し、TK209型式を前後する様相を示す。鉄鏃は、長頸柳葉形、短頸ナゲ関柳葉形が出土しており、少なくともTK43型式期以降に普遍的に見られる形態である（水野2003）。圭頭大刀については、基本的にTK209～217型式の須恵器と共伴する傾向があることが先行研究で明らかにされている（菊池2010）。したがって、本古墳はTK209型式相当期に該当が妥当かと考えられる。

以上、簡潔に各古墳の特徴およびその構築時期に触れた。当古墳群は横穴式石室（1・3号墳）と横穴式木室（2・4号墳）の構造をとる古墳が隣接して築造されているが、副葬品はいずれも須恵器・装身具・刀剣類を主体としており、築造時期もTK209型式期を前後する時期であると考えられる。また、4号墳については、近畿地方中枢部における横穴式木室の盛行時期・構築法・副葬品組成と比較しても、概ね共通する性格を有していると言える。

2. 道田池古墳群出土大刀の位置づけ

一方で、本古墳群では3号墳に象嵌装大刀、4号墳に金銅装圭頭大刀という高度な製作技術を伴う二つの大刀が出土している。

3号墳の象嵌装大刀のような、ハート形文の縦線型の象嵌文様が施される資料は、大谷氏の研究でTK209型式の須恵器と共伴することが明らかにされている（大谷2018）。また、近畿における鍔付鉄刀の地域性について分析を行った豊島直博氏の研究に拠れば、象嵌鍔は特定地域に濃密に分布し、かつ同様の文様構成をとる型式が集中して出土するとしており、その配布の様相に中央政権の政治的意図を汲み取っている（豊島2001）。大阪府下の象嵌鍔の類例としては、八尾市芝塚古墳における面象嵌鍔の2点の出土が挙げられる。芝塚例は、鍔の面・耳・釦・貴金具にハート形文の象嵌を施しており、本資料と同様の文様構成をとることがわかる。

4号墳の金銅装圭頭大刀についてみると、柄頭の形態は、菊池分類におけるC1類2式に該当し、6世紀末段階に当たる。菊池氏の研究に基づけば、C1類の柄頭と吊手足金具が伴う例は少なく、本例は希少な装具の共伴関係であることがわかる。また、象嵌装の鞘尻金具を伴う類例も少ないようである。分布の傾向を見ると、圭頭大刀は、東日本地域に多く副葬事例が認められ、近畿地方中枢部においては基本的に出土しない。また、C1類2式は、小型円墳や横穴への副葬が大半である。

以上のような特徴を持つ二つの大刀が、横穴式木室墳を含む道田池古墳群において出土していることは、後期後半における大刀の配布原理を考える上で有意であると考えられる。また、近年刀剣研究において活発化する製作集団の系統・系列を議論する上でも、隣接した古墳での副葬事例は重要な意

味を持つであろう。今後の研究の進展を俟ちたい。

おわりに

道田池古墳群は、横穴式木室を持つ2・4号墳の特殊性においてのみ認知されてきたが、本稿で紹介した出土遺物の様相から道田池古墳群の新たな側面を認識できたように思う。

遺物の詳細な性格追求や、当該地域の古墳との関係性・階層性等、検討する余地が残るが、また別稿にて再検討したい。

本稿が、古墳時代研究および和泉地域における地域史研究の一座となれば幸いである。

謝辞

本稿を成すにあたって、以下の個人及び機関に資料の収集、実見、検討に際して多大なる助力を賜った。記して感謝したい。

足立千春、安藤淳、菊池望、鈴木康高、田中英夫、辻川哲朗、辻川智代、初村武寛、浜中邦弘、浜中有紀、若林邦彦、株式会社京都科学、公益財団法人元興寺文化財研究所、同志社大学考古学研究室、同志社大学歴史資料館

註

- 1) 信太山遺跡調査会は、信太山宅地造成計画区域内の遺跡分布図を作成しており、発掘調査を行った遺跡についてはナンバリングを行っている。このうち、道田池古墳群については、1号墳＝No.7、2号墳＝No.8、3号墳＝No.9、4号墳＝No.10という番号を割り振っており、分布図には上述した数字が記載されている。
- 2) 本稿では、丸太材を組み合わせて粘土で被覆する埋葬構造を、近年の研究で定着している「横穴式木室」という用語で表現する。
- 3) 一部の須恵器に「道田池10号墳」という存在しない古墳の号数が注記された資料が存在する。これは当館の過去の資料整理の過程で、註1)に示した「調査会が設定したナンバリング」を「古墳の号数」と誤解したものであると考えられる。そのため「道田池10号墳」の資料は「No.10」、つまりは4号墳の資料であると仮定した。表1で纏めたように、『概報』における4号墳の出土資料の員数とも対応性がとれることから、4号墳の資料とみて問題ないであろう。

参考文献

- 和泉市史編さん委員会編2015「信太山地域の歴史と文化」『和泉市の歴史』4、ぎょうせい。
- 大賀克彦2009「山陰系玉類の基礎的研究」『出雲玉作の特質に関する研究』島根県古代文化センター・島根県埋蔵文化財センター。
- 大阪府教育委員会2007『陶器遺跡・陶器千塚・陶器南遺跡』。
- 大谷晃二2018「古天神古墳出土大刀の時期と系譜」『古天神古墳の研究』島根大学考古学研究室調査報告第17冊。
- 菊池芳朗2010『古墳時代史の展開と東北社会』大阪大学出版会。
- 小森哲也2013「横穴式木室考」『考古学雑誌』第97巻第2号、日本考古学会。
- 信太山遺跡調査団1966『信太山遺跡調査概報一大阪府和泉市一』。
- 柴田 稔1983「横穴式木芯粘土室の基礎的研究」『考古学雑誌』第68巻第4号、日本考古学会。

上寺山古墳研究会2015『上寺山古墳の研究』。

瀧瀬芳之・野中仁1996「埼玉県内出土象嵌遺物の研究」『研究紀要』第12号、埼玉県埋蔵文化財調査事業団。

豊島直博2001「古墳時代後期における直刀の生産と流通」『考古学研究』第48巻第2号、考古学研究会。

中村 浩2001『和泉陶器窯出土須恵器の型式編年』芙蓉書房出版。

花谷 浩1986「素環鏡板付轡の編年とその性格」『山陰考古学の諸問題』山本清先生喜寿記念記念論集。

水野敏典2003「鉄鏃にみる古墳時代後期の諸段階」『後期古墳の諸段階』第8回東北関東前方後円墳研究会。

水野正好1974「群集墳の群構造とその性格」『高山古墳群調査報告書』小野市教育委員会。

森 浩一1959「窯槨を主体施設とした火葬古墳の新例」『日本考古学協会第23回総会研究発表要旨』。

【史料1】信太山遺跡調査団1966『信太山遺跡調査概報—大阪府和泉市—』抜粋

道田池1号墳 (No.7)

東西径約11m余、現高0.8m強の円墳で、主体は横穴式石室であったが、石室を構成した石材は、西側壁最下段の2石を残して全部抜き去られていた。しかし地山を約60cm掘りこんだ土壌の底部に、側石を抜き取った痕跡が歴然と印刻されており、もと、全長9m内外、玄室長約4.5m、巾約1.5mほどで、玄室底面に栗石を敷き、羨道部の底は断面U字形に、排水溝としての機能を果たせるためか、巾広く羨門側ほど深く地山を掘り凹めていることが判明した。内部が完全に攪乱されていたため、遺物は鉄器の断片と須恵器片（長頸壺・高杯等）若干を認めたに過ぎない。（石部）

道田池2号墳 (No.8)

前者の北東約37.5mに位置する径約14m、高さ1m弱の円墳。そのほぼ中央に設置されたカマド槨は南北長3m、巾2.45mの方形に近いプランを呈し、周囲には、上部を内傾させた丸太痕が点々と並びその数は北辺17本、西辺19本である。北辺は奥壁に当ると考えられ、柱痕の傾斜はわずかであるが、両側壁は約48°の急傾斜で内に傾く。槨壁の高さは、北辺で約80cmまで残存していた。床は2面が認められ第2次埋葬に際しては、第1次埋葬の火葬骨片と副葬品を一たん外部にとり出してから火葬を行なったらしい。ところが、その過程で槨が崩落したとみえて、第1次埋葬遺物と推定されるものの大部分が崩落した槨壁の上部にまとめて安置されていた。それらの遺物はすべて火熱のために変質していた。その品目は水晶勾玉1・同切子玉1・管玉2・銅環1・直刀1・鋤先1・杯蓋その他須恵器片若干・釘若干である。（森）

道田池3号墳 (No.9)

横穴式石室の石材をほぼ完全に抜き去られている点、1号墳と同様だが床面の遺物はかなりよく残存していた。径約15m、高さ1.2mの円墳状を呈するが、石室がかなり東へ偏在していることは、もとの墳丘規模がいまより大きかったことを示唆する。石室は全長5.1m、玄室長2.4m、巾1.2mほどの片袖式であったらしい。金環1対・琥珀製棗玉4・銀丸玉3・ガラス小玉31・直刀1・柄頭1・鐔1・轡・須恵器（長頸壺2・短頸壺4・杯身1・杯蓋1等）・釘若干を検出した。（田中）

道田池4号墳 (No.10)

この古墳は3号墳の北西に接して位置し現在全く墳丘をなさないが、外形実測では高さ20cmの等高線が一本走る程度である。墳丘らしき周囲には、塹壕が掘りめぐらされて原状をとどめないが、径約15mの円墳であろうと思われる。外部施設は全く認められなかった。

内部主体はカマ形木槨という非常にめずらしいものである。構築は近来注目され始めたカマド槨と同じ原理でありながら、木槨内が火熱を受けていないといった特殊なものである。カマ形木槨の長さ4.7m、巾2.4m、高さ現存部で約50cmを計ることができる。柱穴は45本を確認し、そのほとんどが10×15cmの丸太棒であ

るが、中には半裁の丸太もみられた。

主体は地山を掘りくぼめて床面をつくり、掘り方より25～40cmのところに柱穴を並べているが、丸太の角度は20°ぐらいのが一番多かった。

遺物の出土状態は、カマ形木槨奥の方に杯、鉄鏃、釘等の一括遺物が、またカマ形木槨中央の左寄りに須恵器の一群（高杯、平瓶、長頸壺、杯等）が検出された。そして、焚口に相当する部分の右側隅より金銅装圭頭柄頭、銅鐔付直刀、靱尻金具、須恵器の高杯や杯等が出土した。主体中央は塹壕のため攪乱されており遺物の検出はなかったが、攪乱層中より須恵器片が若干と金環1個が表土直下より検出された。

出土遺物中で特に注目すべきものは圭頭柄頭である。金銅装であるが殊に仏像などの金メッキに似たもので、銅鐔付直刀と離れて出土したが、同一個体としてみるのがよからう。出土遺物を一括すると次の如くなる。

装身具：金環1、須恵器：高杯3、杯蓋4、平瓶1、長頸壺1、短頸壺1、鉄器：金銅装圭頭柄頭1、銅鐔付直刀1、靱尻金具1、鉄鏃4、刀子2：釘8本以上。（堀田）

【史料2】田中英夫氏日誌抜粋（原文ママ）

1965年12月22日 晴

午前9時より昨日に引き続き3号墳の墳形測量を開始、午後4時30分西南部の地形部分を残して完了（田中・辻川・浅井・山本）

12月23日 雨

作業できず。墳形観察のみ

12月24日 午前小雨、午後晴

午前中に3号墳の測量完了

午後より4号墳の測量開始 北西部と東南部の一部を残して測量完了（田中・辻川・浅井・山本・岡部・大津高地歴部）

12月25日 晴

午前中に4号墳の測量完了 午後より1号墳の草刈、2号墳の測量と3号墳・4号墳の発掘開始

3号墳直径約15M、高さ約1.2M、4号墳直径約15M、高さほとんど無し

LPは2墳共通138cmとする。

3号墳は墳丘の中心で直交する幅20cmの壁を残して全面発掘とする。

4号墳は攪乱層より金張銅環1個、表土下65cmで川原石、須恵器高杯・長頸壺・柄頭が現れてきた。（田中・堀田・白石・辻川・浅井・山本・岡部・河合・田所・同志社の峯・恒次・木村）

12月26日 晴

3号墳は表土めぐり、表土下50cmの黄灰色粘質土上に須恵器破片と河原石が現れる。

4号墳床面より柱穴現れ、カマド槨の様相が明確になる。

2号墳の測量完了

1号墳の墳形測量を開始する（午後より）。

白石・峯・恒次・木村の諸氏は大野池西須恵器窯址の予備調査に回った。

（森・石部・田中・堀田・辻川・浅井・山本・河合・田所）

12月27日 晴

3号墳は昨日に続いて封土の掘り下げ、南東と南西部に封土の掘り込みが認められ、底部に河原石が敷かれ須恵器が認められた。主体部は南に偏っているらしいので発掘範囲を拡大する

4号墳は柱穴、遺物、床面の検出を行い、写真撮影、封土断面図作成、遺物平面図一部作成。

昨日検出した刀を掘り広げたところこの部分は圭頭大刀の把の先端であり、25日の物と同一と判明、銅鐔、

1の足、2の足が金銅製の太刀がほぼ完全に検出された。ただ鞘尻が見つからない。

土器は長脚高杯2個、短脚高杯1個、壺1個、長頸壺1個、杯破片1、不明1、刀子2が検出された。1号墳の測量完了。(森・田中・堀田・浅井・山本・朝比奈・河合)

12月28日 雨

降雨により作業中止12月29日

4号墳 堀田・岩佐・笠井にて平面図作成

1号墳 辻川・浅井・山本・岡部にて発掘

3号墳 田中・河合・音田・由留出・寺田正・奥野にて発掘と測量

午前中にC側の断面図作成、墳丘の中心部は大きく、深く掘削されている事が判明、主体部は完全に破壊されている模様。縁端掘り込みの底部付近に河原石と70cm×45cm大型石が存在。

12月30日 曇り一時雨

1号墳 白石・峯・古谷・西川

2号墳 辻川・浅井・山本・今井

3号墳 田中・寺田正・音田

表土下60cmの河原石の平面図作成。掘り込みの西部への掘り広げ。

4号墳 堀田・岩佐・笠井

櫛内東部の高い部分の河原石を取り除き、西部と同レベル面にする。その面で河原石・須恵器(杯・杯蓋)・鉄器(釘?鉄鏃)の平面図作成、遺物取り上げ。

1966年1月4日 雨のち晴れ 風強し 11時作業開始

3号墳 田中・寺田利・寺田正・音田・由留出にて墳丘西側の掘り込み部分の縁端を追求する。

1月5日

3号墳 田中・寺田利・音田・由留出

主体部は石材を殆ど運び出した横穴式石室と確定、床面と石材の抜き取り痕の検出を行う。

1月7日

3号墳 床面の金環2個、ガラス玉、棗玉、空玉、を取り上げ、実測図作成する。

1月8日

3号墳 田中・寺田利・寺田正・音田・由留出

遺物の配置図を作成、取り上げを行う。下向きの杯の中にガラス玉1個存在。刀は先端を東に、刃は南を向く。馬具はハミが上下に重なっている。空玉の中にガラス玉2個存在。

1月9日

3号墳 田中・寺田利・音田・由留出・河合

石室の奥壁と側壁の石材の抜き取り痕の検出。平面図・断面図作成。

P-6の胴部の大半が石材の抜き取り痕の中にあった。

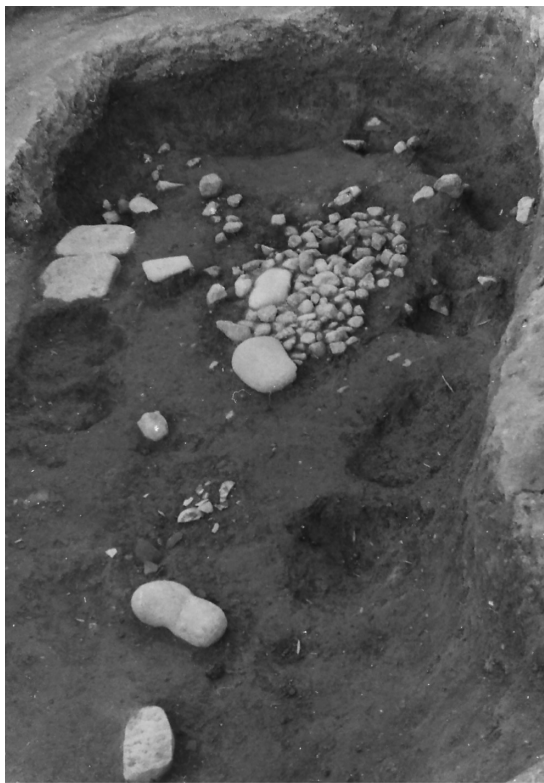
1月10日

3号墳 田中

羨道先端の延長部の地山の掘り方の検出を行う。この掘り方は排水のためのものか。

P-7(台付壺)、P-8(短頸壺)検出、羨道先端の延長部攪乱層よりP-6の破片と器台の破片を採集。

図版1(調査写真①)



1 1号墳主体部全景



4 3号墳主体部全景(西から)



2 2号墳主体部全景(東から)



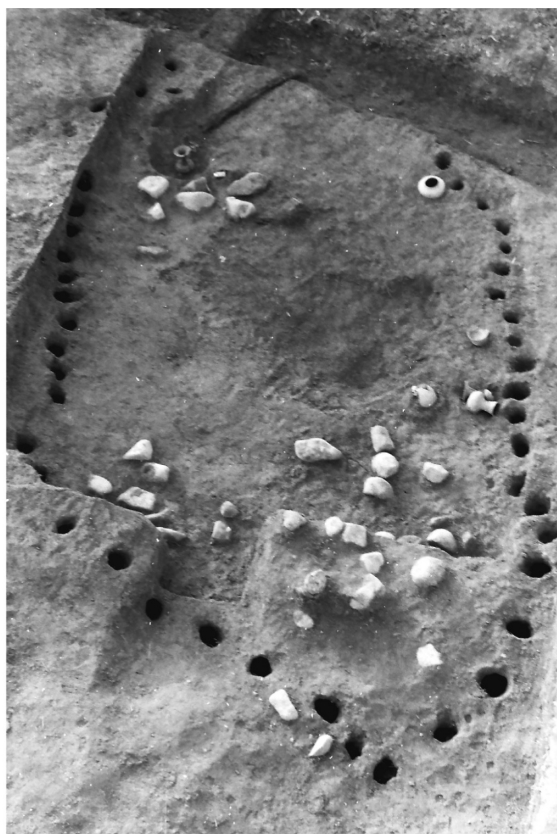
3 2号墳主体部全景(南から)



5 3号墳主体部全景(東から)



6 3号墳主体部遺物集中部



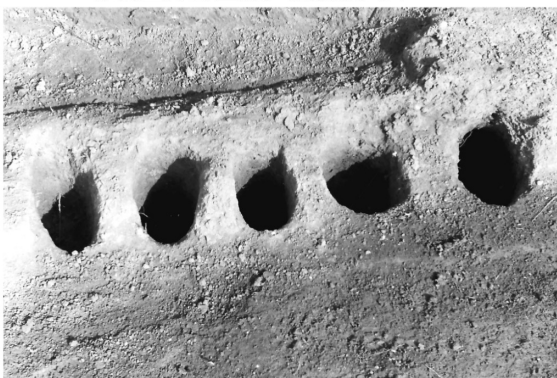
1 4号墳主体部全景（南東から）



2 金銅装主頭大刀柄頭検出時状況①



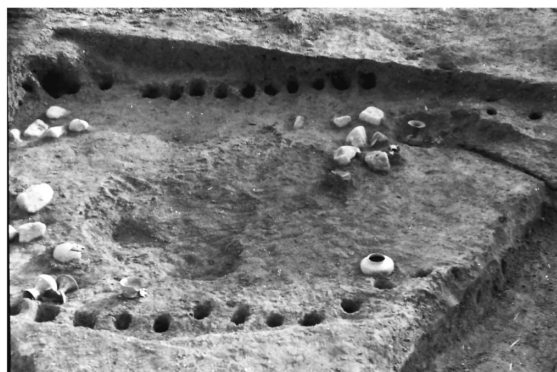
3 金銅装主頭大刀柄頭検出時状況②



4 柱穴の痕跡



5 4号墳主体部全景（南東から）



6 4号墳主体部全景（北から）

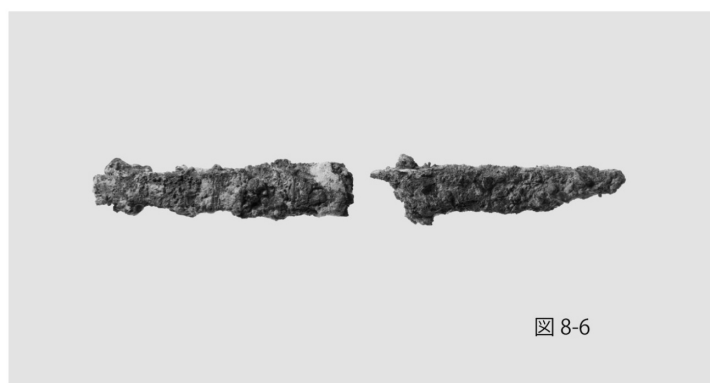


7 4号墳主体部全景（西から）

図版3(出土遺物①)



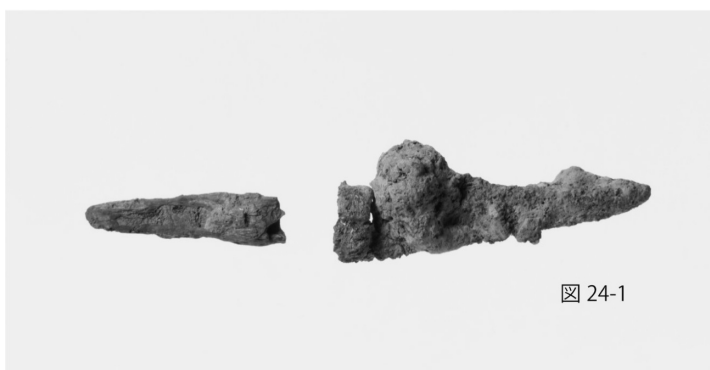
1 2号墳出土 装身具



2 2号墳出土 刀子



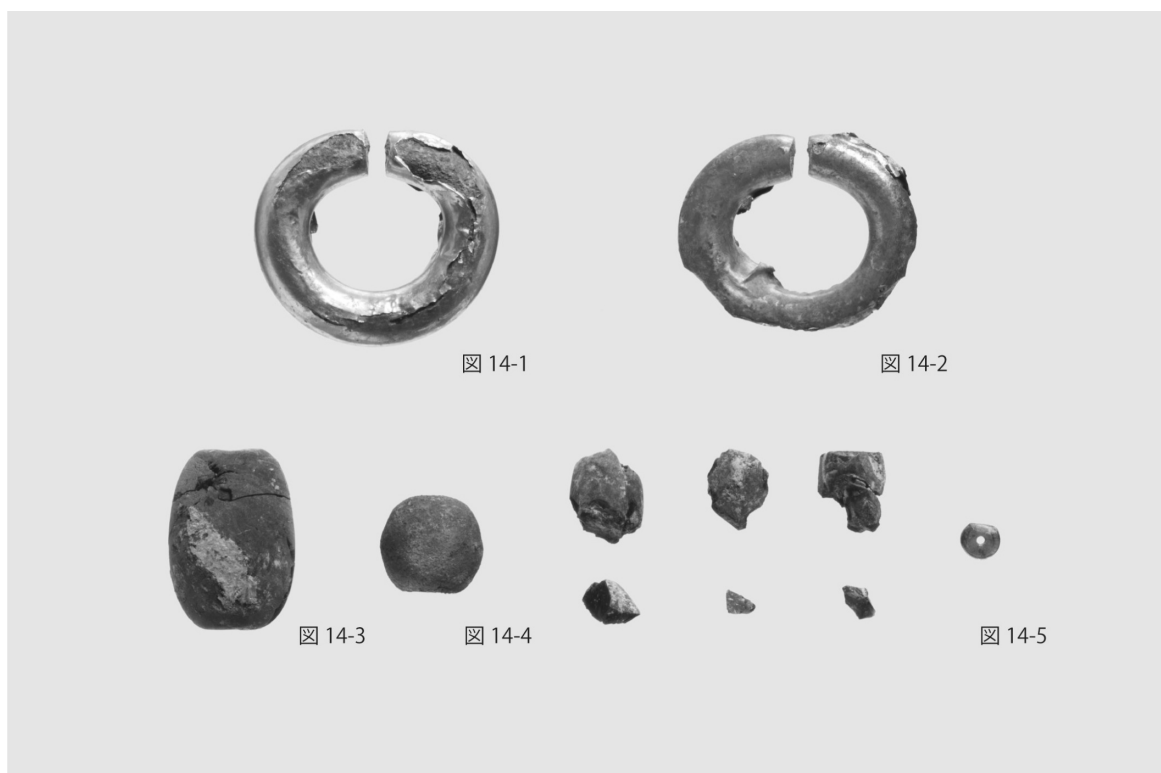
3 2号墳出土 須恵器片



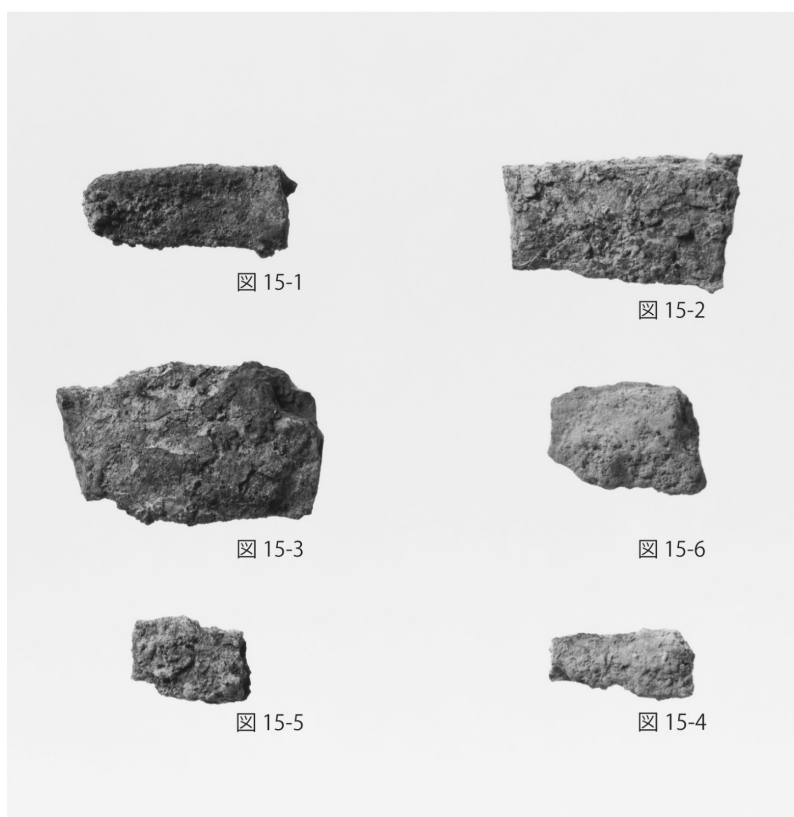
4 帰属不明 刀子



5 帰属不明 釘?



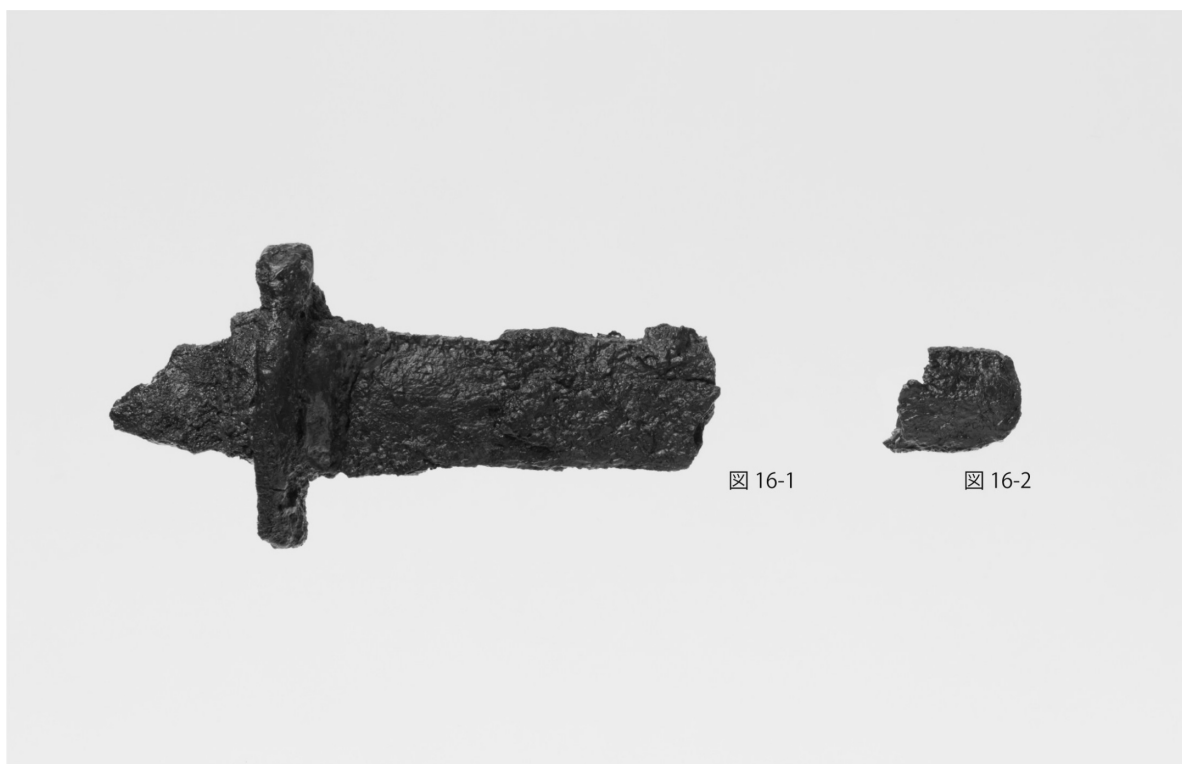
1 3号墳出土 装身具



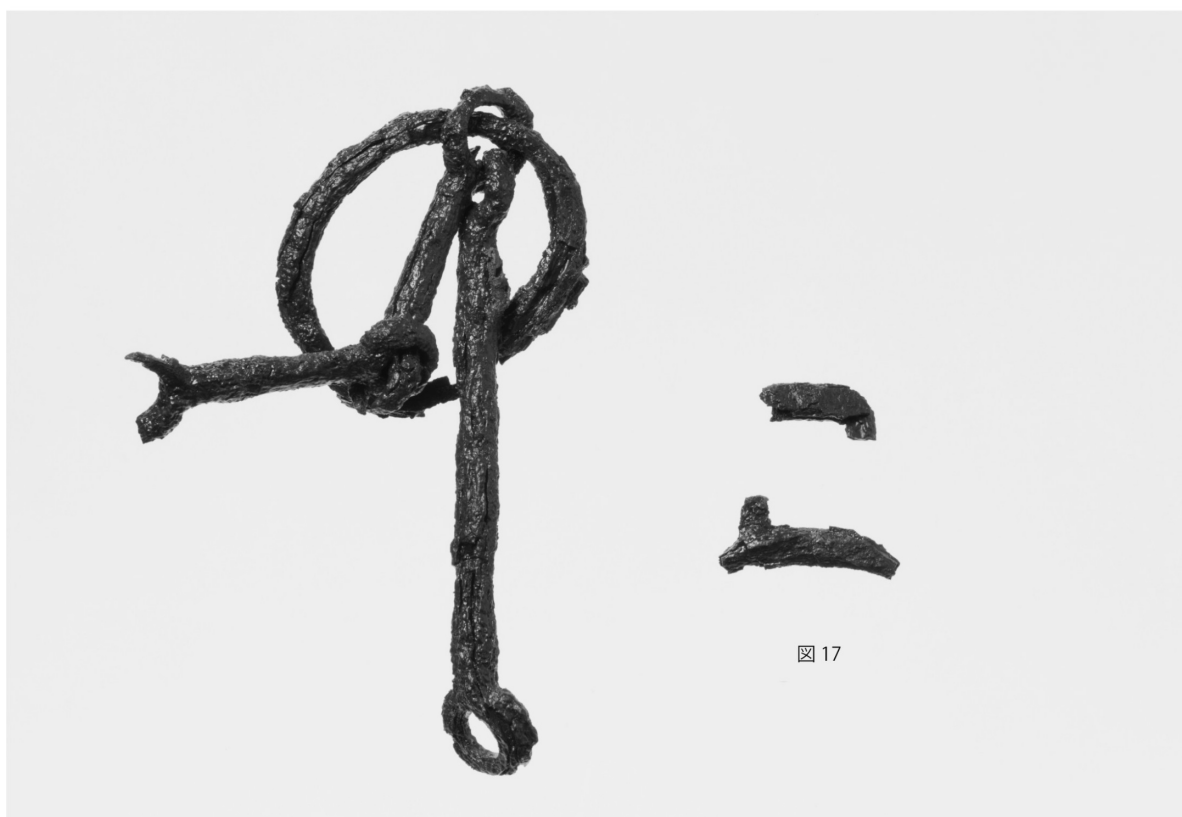
2 3号墳出土 鉄器片



3 3号墳出土 鉄釘



1 3号墳出土 銀装象嵌大刀



2 3号墳出土 馬具

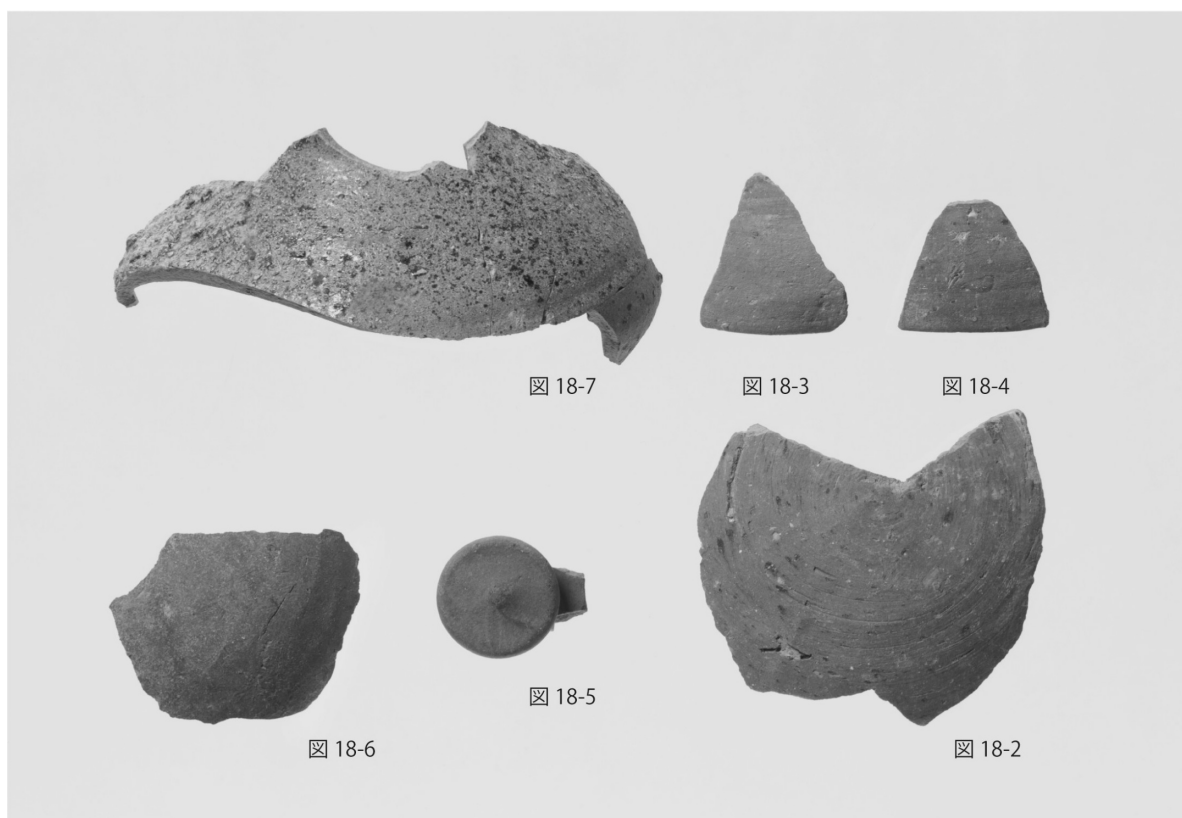


1 3号墳出土 須恵器(1)



図 18-8

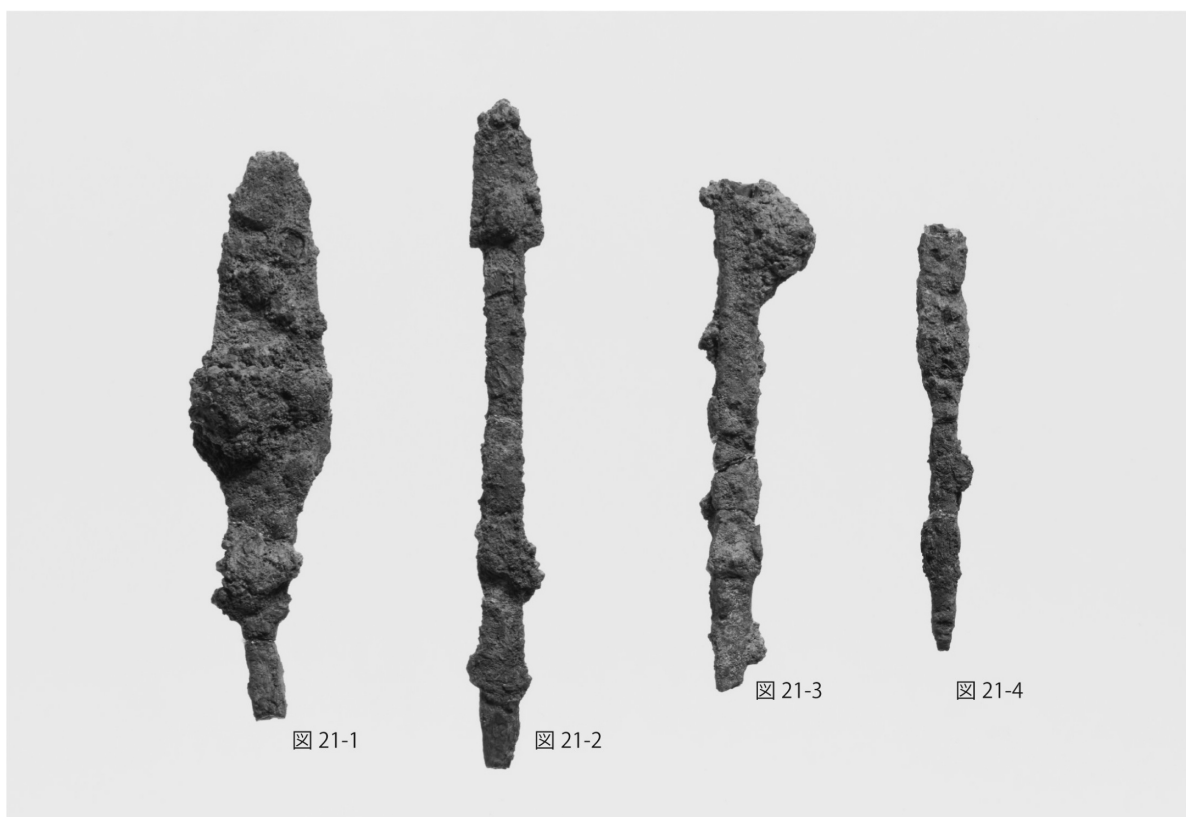
2 3号墳出土 須恵器(2)



3 3号墳出土 須恵器(3)



1 4号墳出土 装身具



2 4号墳出土 鉄鏃



図 22

4号墳出土 金銅装圭頭大刀

図版9 (出土遺物⑦)



1 金銅装圭頭大刀 (足金具)



2 金銅装圭頭大刀 (柄間)



3 金銅装圭頭大刀 (鐔)



4 金銅装圭頭大刀 (鐔)



5 金銅装圭頭大刀 (鞘尻金具)



6 金銅装圭頭大刀 (柄頭)



7 金銅装圭頭大刀 (柄頭内面)



1 4号墳出土 須恵器(1)



2 4号墳出土 須恵器(2)



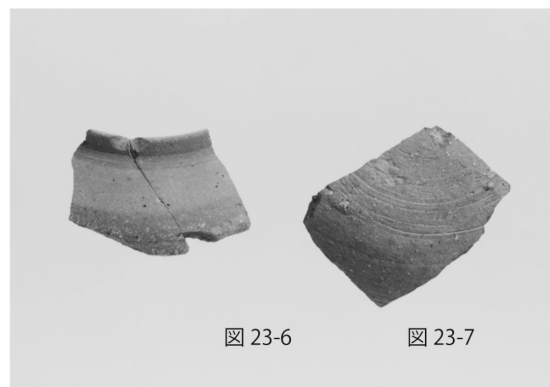
3 4号墳出土 須恵器(3)



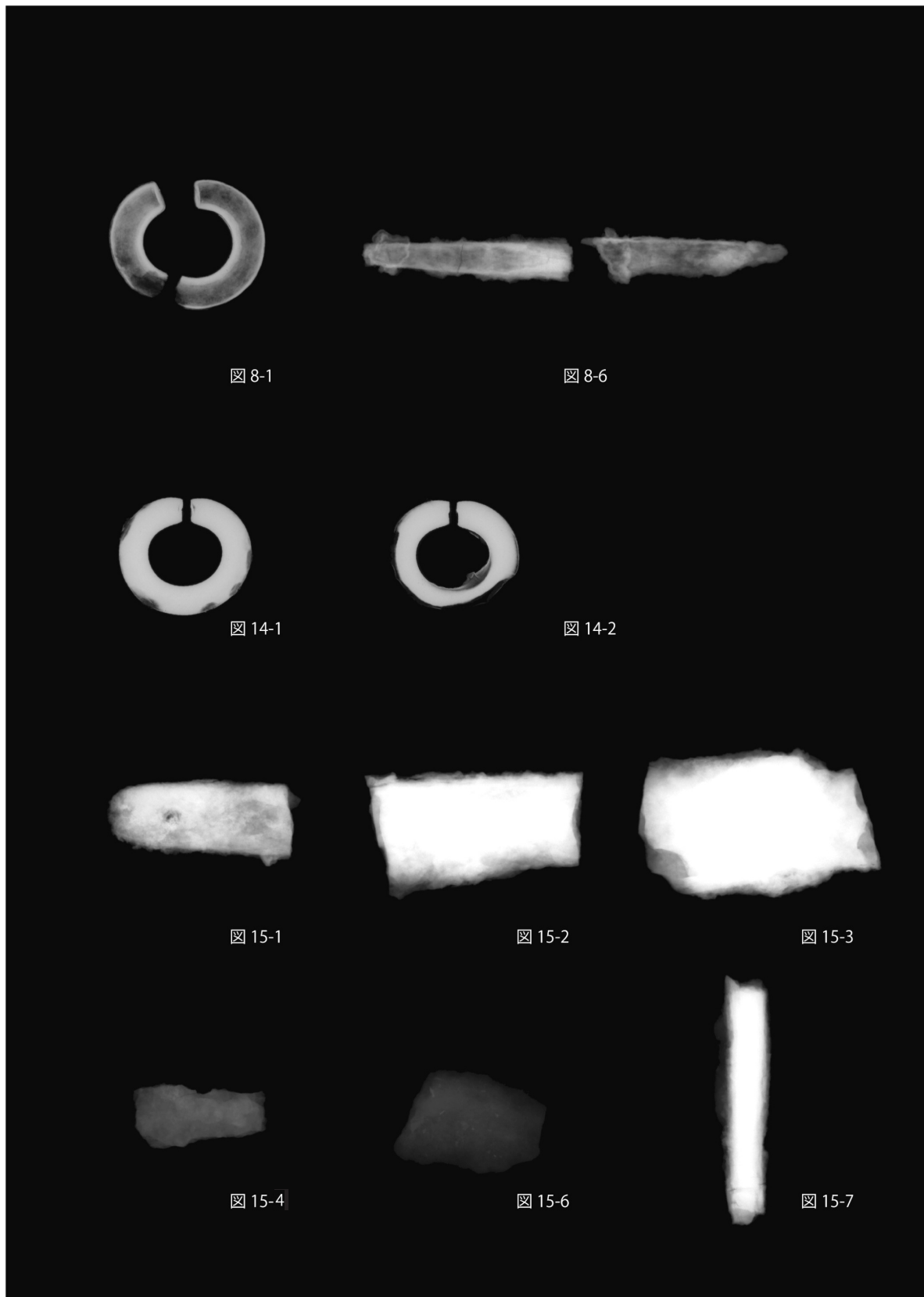
4 4号墳出土 須恵器(4)



5 4号墳出土 須恵器(5)



6 4号墳出土 須恵器(6)



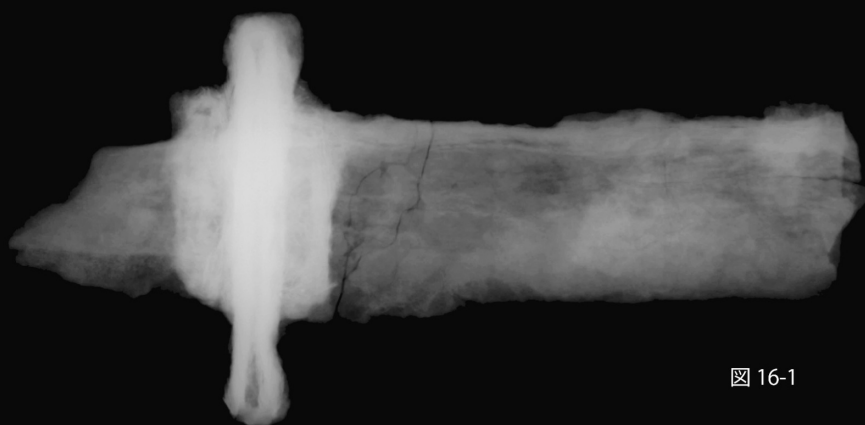


図 16-1

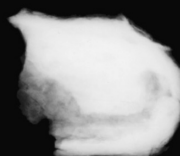
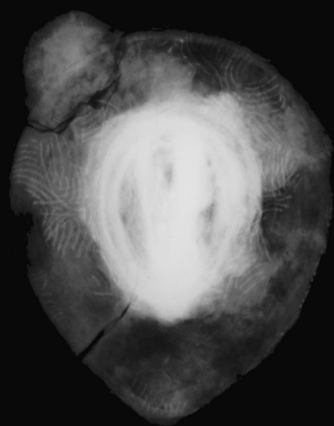


図 16-2

図版13 (X線写真③)

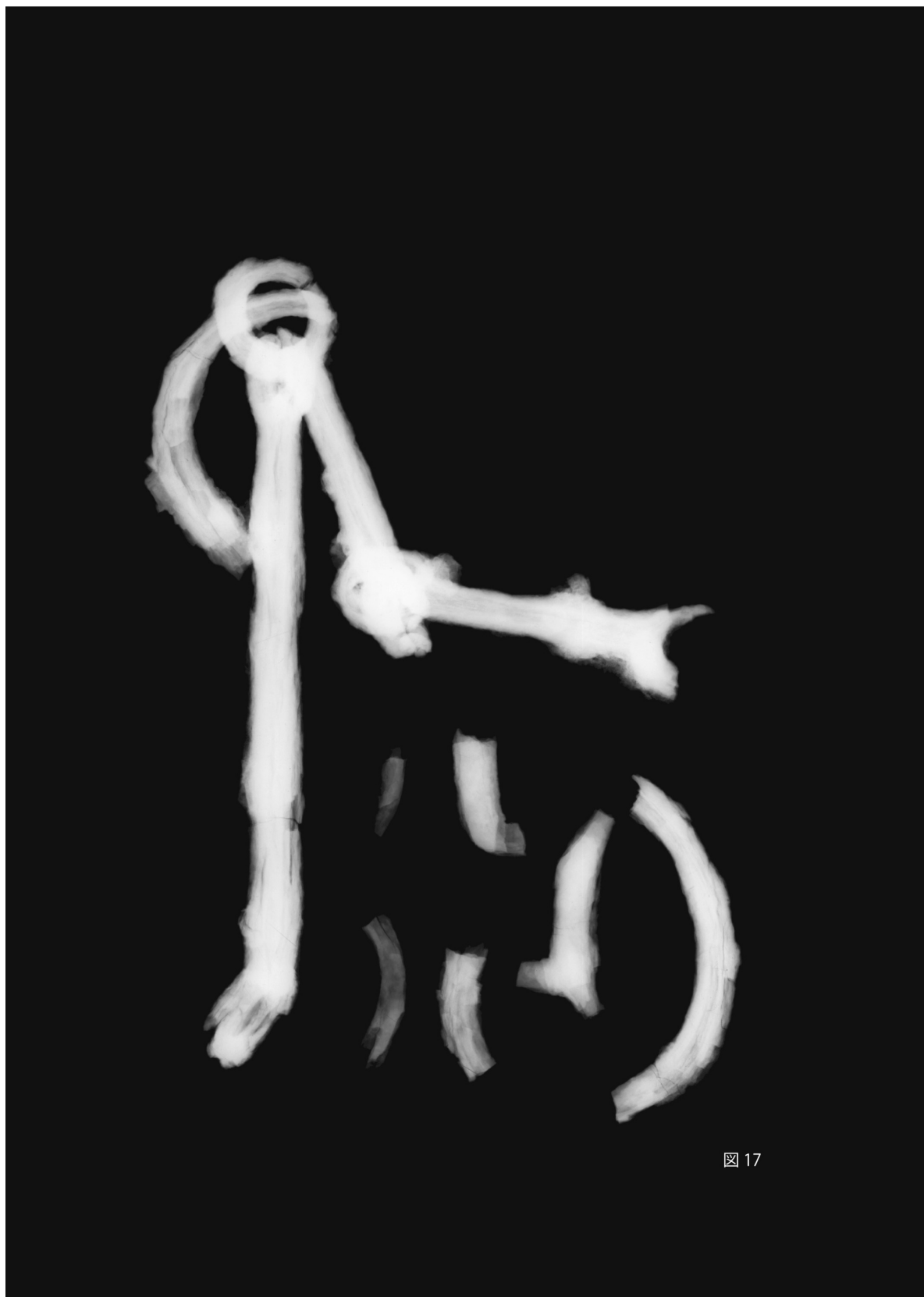




図 20-1

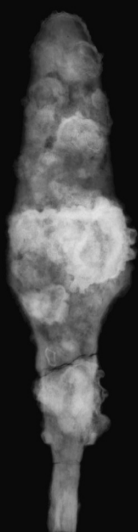


図 21-1



図 21-2

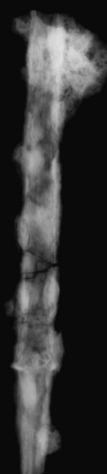


図 21-3



図 21-4

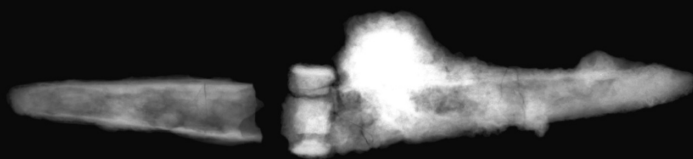


図 24-1

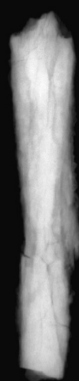


図 24-2

図版15 (X線写真⑤)

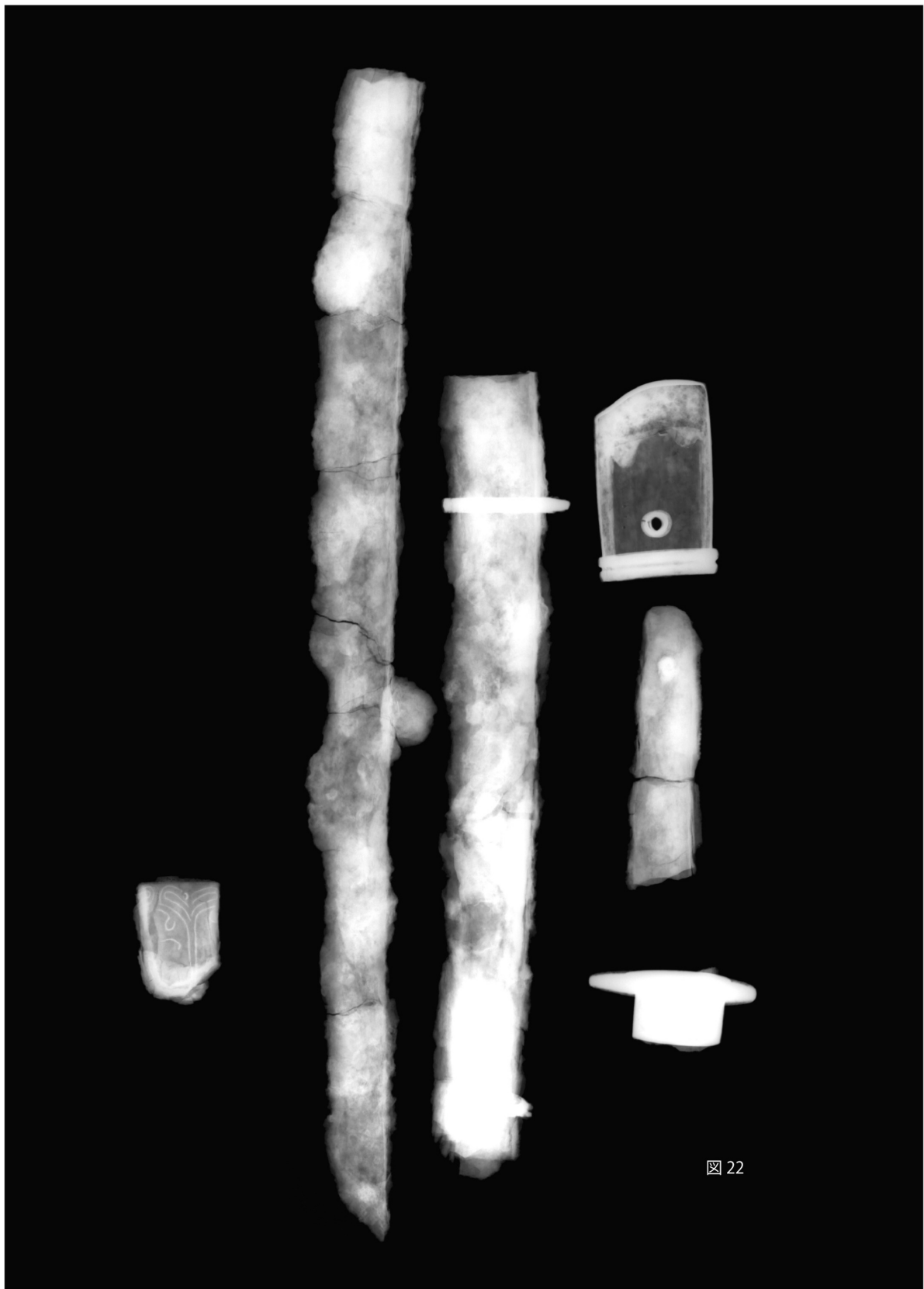


図 22